

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

下手良中原・大原・松太郎窪遺跡

2001.3

上伊那地方事務所

伊那市教育委員会

序

下手良中原・大原・松太郎窪遺跡はすべて伊那市手良沢岡地籍の南部一帯に所在している。この三ヵ所の遺跡付近は、棚沢川の河岸段丘面及び八ツ手川の河岸段丘面、山麓扇状地面に存在し、段丘崖面には多量の湧水が見うけられます。

大正末年頃に来伊して、手良地区の遺跡をくまなく踏査されると同時に出土遺物を実見され大著『先史及原史時代の上伊那』を出版された鳥居龍藏博士は、この書物の中で、これらの遺跡の重要性を大大的に指摘しています。

たまたま、手良地区では農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（通称、農免道路整備事業）が導入されることになり、平成13年7月中旬から10月下旬まで、あしかけ3ヵ月間にわたって発掘調査を実施することになりました。

発掘調査面積は凡そ2,300m²に及び、奈良時代から平安時代に亘る竪穴住居址17軒、その他、多量の遺物が発見されました。この事象は平安時代中期頃に編纂された『倭名類聚鈔』に記載されている古代の郷村「弓良郷」の存在性を強く示唆されたわけであります。

この報告書は調査成果をまとめたものであり、このような成果をおさめ得たことは、長野県教育委員会、上伊那地方事務所、地元の方々をはじめ、直接発掘に従事された発掘調査団長、調査員、作業員の皆様のご尽力の賜であり、ここに深く感謝申し上げるとともに、この報告書が、今後教育文化の向上に活用されることを切に願って止みません。

平成13年3月

伊那市教育委員会

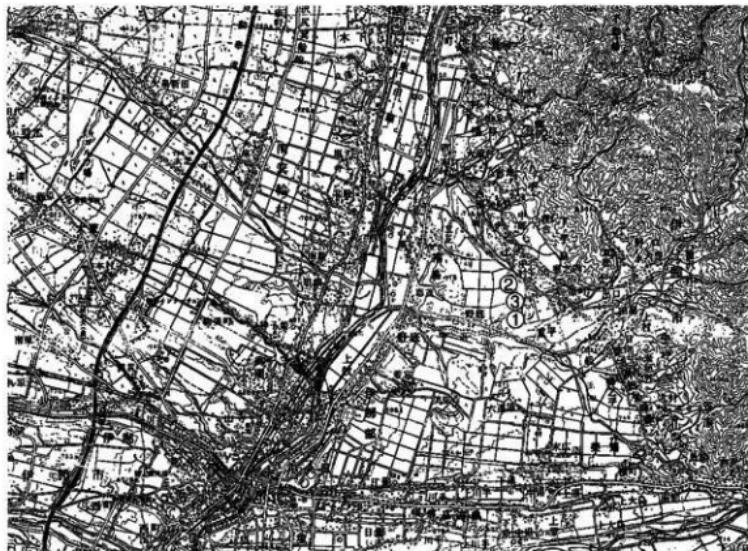
教育長 保 科 恭 治

まえがき（下手良中原・大原・松太郎窪遺跡の環境）

遺跡の位置

下手良中原遺跡、大原遺跡、松太郎窪遺跡は長野県伊那市大字手良沢岡地籍の南部一帯に連続的に南北に帯状を呈しながら展開している。三つの遺跡の南端は棚沢川に面し、この位置に存在しているのが下手良中原遺跡、中央部付近は「松太郎窪」と名乗る小さな沢が東から西に向かって急勾配で見られる、この地点に存在するのが松太郎窪遺跡である。「松太郎窪」を隔てた北側に平坦地が広く展開し、このところが大原遺跡の中心部である。

この辺で前述した遺跡地までに至る道順を案内申しあげる。遺跡地に至る道順は凡そ二方向に限定されるであろう。第一の道順はJR飯田線伊那北駅で下車して東に向かって進み、天竜川に架かる二条橋を渡り、主要地方道伊那・辰野線（通称竜東線）を辰野方面へ約4.5km北進し、野底集落の北はずれ、伊那北保育所近くの信号機のある四叉路を右折して、市道野底・手良線を東へ進む。進み始めてすぐに棚沢川（地元では野底川と呼んでいる）を渡り、しばらく行くと右手に溜池工法を導入した「野底堤」が木々の間から見られ、水を満々と湛えている。この堤から東へ500m程進むと、三叉路に直面するが、ここで進路を左に取り、勾配の急な坂



位置図 (1 : 75,000)
①下手良中原遺跡 ②大原遺跡 ③松太郎窪遺跡

を登り続け中途で左折して南に向かって200m程直進すると、果樹園や水田地帯が広がり、緑一面の田園風景を呈している。この一帯が下手良中原遺跡の中心地であり、この遺跡の北に接して「松太郎窪」と呼ばれている沢があり、この沢の北側一帯が松太郎窪遺跡である。松太郎窪遺跡に隣接して大原遺跡が広範囲にわたって存在している。

第二の道順は伊那市街地より東へ杖突街道を高遠町方面へ約5km行くと、近年、住宅化が急激に進んでいる美鷹上原集落に至る。この集落と上大島集落の境界付近で杖突街道と別れて左折して北進すると、ただちに左に美鷹小学校校舎が目に入る。校舎のすぐ北側には三峰川右岸第二河岸段丘が東西に走り、段丘崖には見事な礫層やテフラ層が何層にもわたくて厚く堆積しており、地質学的研究には格好の場所になっている。段丘崖は山林景観を呈してはいるが、一部ではこれを取り除いて宅地化が及んでいる。この一帯を登りつめると広々とした平坦地が連なっている。以前、この面一帯は畠地、森林で塗り覆われていたが、三峰川総合開発時に、高遠ダムより導水して水田化した。秋ともなればあたり一面、稻穂の波が漂い、これに群れ遊ぶ「赤トンボ」は田舎の郷愁を沸きたたせてくれる。

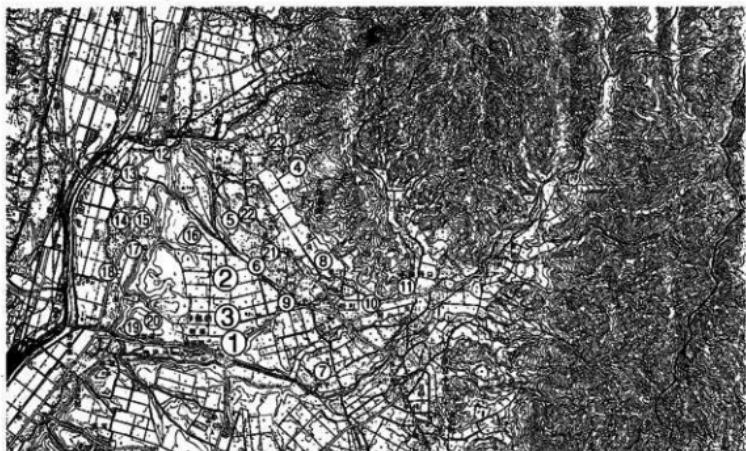
美鷹末広集落を通過して、杖突街道分岐点から約2.5kmで手良中坪集落に至る。中坪に祀つてある八幡社の前で左折して県道美鷹・箕輪線を西進し、約2kmで手良地区の中心部に及ぶこの地区には伊那市役所手良支所、手良郵便局、手良小学校、手良保育所、手良土地改良区事務所が棟を並べて建っている。手良の中心部より西方へ約500m行った付近一帯に前述した三つの遺跡が密集して南北に列状を呈しながら点在している。

地形及び周辺の遺跡分布

1. 地形・地質

下手良中原・大原・松太郎窪遺跡の点在する付近の地形は前述したように南側は棚沢川、中央部付近は松太郎窪、北側はハツ手川に面した状態になっているのが現状であり、これらの河川は西流して、最終的には天竜川に合流する。かつては松太郎窪の崖一帯に湧水が多量にあったと、付近の住民が語ってくれた。全般的にみて、遺跡地周辺は乾田化の景観を呈し、耕土は黒く、肥沃であった。これらの水田一帯は昭和40年代前半の圃場整備事業導入によって、近代化農業が押し進められている現状である。

地質については『辻西幅遺跡発掘調査報告書』によれば次のようになる。「手良地域の東部山地は領家変成岩帶の高速花崗岩より成立している。この地域に分布している領家変成岩類は古生代及び中生代に海底に堆積した砂や泥を主とする堆積物が、広域的な変成作用を受けて雲母片岩や黒雲母片麻岩に変化したのである。また、これらの変成岩は、中世紀末から新生代、古第三紀にかけて貫入した高速花崗岩によって接触変成作用を受け、花崗岩の周辺部では黄青石ホルンフェルス等を含む接触変成体を形成している。下手良中原・大原・松太郎窪遺跡は礫



下手良中原・大原・松太郎窪遺跡周辺の地形及び遺跡分布図（1：50,000）

層の上に砂礫混合のテフラ層が堆積し、安定度は高かった。礫層を構成する種類は砂岩・粘板岩緑色岩を主とする5~20cmの亜円礫で、風土の進化度は顕著であった。これらの礫は東方の山地に存在する領家帯の岩石ではなく、中央構造線よりもさらに東方の三峰川帯、秩父帯、四十万帯から運ばれてきたものであり、三峰川の扇状地礫層と想定される。」

「砂層を構成する砂粒は黒雲母・石英・長石の他に磁鉄鉱、しそ輝石等が混入する。これらの鉱物は火山起源のものではなく、東方山地の領家帯の岩石を含んだ鉱物であり、主として沢岡川上流の東松方面から流水によって運ばれて堆積したものと考えられる。砂層の上部から下部にかけて始良Tn火山灰（九州鹿児島湾の始良カルデラから約25,000年前に飛来した火山灰。略称AT）の火山ガラスと形態が同じ火山ガスがわずかではあるが含まれている。おそらく二次的に移動してきて混入したものと思われる。」

2. 周辺遺跡の分布

本調査報告書で取り扱う下手良中原・大原・松太郎窪遺跡の周辺には縄文時代早期～江戸時代に至る各種各様な数多くの遺跡が確認されている。これらを時代的な幅で考えてみると、約一万年の数値に達し、この間は連続として人間の営みが続いたのである。

次頁に「周辺遺跡一覧表」を提示し、その内容項目は遺跡名、所在地、地形、時期であった。NOについては、「下手良中原・大原・松太郎窪遺跡周辺の地形及び遺跡分布図」内の番号と一致している。時期については土器編年を採用して記述した。

先に述べた三つの遺跡周辺の遺跡発掘調査は過去、島崎遺跡（第1次～第2次）、堤林遺跡、山の田遺跡、鍛冶垣外遺跡、辻西幅遺跡（第1次～第2次）でそれぞれ実施され、その調査報告書が刊行されている。これらの遺跡発掘調査成果については歴史的環境のところで触れるの

で、今回は省略しておこう。

遺跡の分布状況を概観してみると、棚沢川、ハツ手川、沢岡川等々の大小河川によって形成された河岸段丘面上に存在している場合が多く、山麓扇状地面状の遺跡存在度は低い。この理由としては自然地理学的みて水との関連性を強く示唆してくれる。

(飯塚政美)

歴史的環境

伊那市東部地域の北部一角に位置している手良地域は天竜川左岸河岸段丘と、天竜川の主要な支流の一つに含まれる棚沢川や三峰川の活動によって形成された段丘面を基盤にして、その上に東側山麓地帯より流出した多量の土砂を堆積して広大な山麓扇状地面を形造した。何回にもよる扇状地形造活動終了後、その上に厚いテフラ層が覆い、さらに、その上に安定した土壤が集積している。

ハツ手地籍（今回、遺跡発掘調査した沢岡地籍と接している）に人間の足跡が始まっているのは現在、分かっている段階で、山の田遺跡出土の縄文早期精円押型文土器（約8,000年前）が最古である。さらに、「発掘調査報告書」より同遺跡から出土した土器類を列記する。縄文早期末葉で貝殻条痕文に主特徴を持つ茅山式土器、縄文中期初頭の梨久保式土器、中期中葉の井戸尻式土器、中期後葉の曾利式土器などである。

時代は下って、弥生時代に入る。天竜川水系を遡って稻作農耕文化を波及させた水神平式土器文化が伊那谷に浸透していく。

No.	遺跡名	所在地	地形	時期
1	下手良中原	手良沢岡	段丘 上	奈良時代土師器 奈良時代須恵器 和銅開珎
2	大原	〃	扇状地上	奈良時代土師器 奈良時代須恵器 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
3	松太郎座	〃	〃	精円押型文 曾利 平安時代土師器 平安時代灰釉陶器
4	山の田	手良ハツ手	山麓線上	精円押型文 繩ヶ島台子 母口 梨久保 井戸尻 曾利 水神平Ⅱ 平安時代土師器 平安時代須恵器
5	中原	〃	扇状地上	中島 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
6	堀外	手良下手良	平地上	曾利
7	二重平	〃	段丘 上	奈良時代土師器 奈良時代須恵器 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
8	角城	〃	台地上	平安時代須恵器
9	南垣外	〃	〃	〃
10	鍛冶垣外	手良野口	扇状地上	曾利 球ノ内 中島 平安時代土師器 平安時代灰釉陶器 平安時代須恵器 中世陶磁器類
11	古八幡	〃	山麓線上	中島
12	南原福島	島	段丘 上	曾利 球ノ内 平安時代土師器 平安時代灰釉陶器 平安時代須恵器
13	大上平	〃	〃	平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
14	福島上平Ⅲ	〃	〃	平安時代土師器 平安時代須恵器
15	福島上平Ⅰ	〃	〃	平安時代灰釉陶器
16	池火平	〃	〃	曾利 中島 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
17	福島上平Ⅱ	〃	〃	平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
18	福島上平Ⅳ	〃	〃	〃
19	福島古墳群	〃	〃	横穴式石室 円墳 8基
20	原	〃	〃	曾利
21	辻西福	手良沢岡	扇状地上	平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器
22	鳥崎	手良ハツ手	台地上	平出3A 井戸尻 曾利 中島式 中世陶磁器類 近世陶磁器類 内耳土器
23	堤林	〃	扇状地上	大湧A 標王 平安時代土師器 永楽通宝 中世陶磁器類 近世陶磁器類

周辺遺跡一覧表

この文化の存在を実証する土器片が先の山の田遺跡から出土していた。当時の水田形態は湿田が多く、沢水を集めて水田をこしらえたのであろう。この遺跡は標高が760m程あり、八ツ手集落より北端部に位置している。近年、問題になってきている弥生時代高地性集落の草分け的存在ではないだろうか。畑作振興も盛んに行われていたと思われる。

さらに時代は下って、古墳時代に入り、八ツ手集落から瀬沢川を隔てた南側には六ツ塚古墳の残骸が1基見受けられ、形状は円形である。古墳の名称からして、かつては、六基の存在性を裏付けてくれると同時に、古墳時代終末期の群集墳の展開を成していたと思われる。現在、八ツ手地籍内には六ツ塚古墳築造時と同じ頃、すなわち、古墳時代終末期（六世紀後半～七世紀前半）の集落址の存在は確認されていないが、近郷近在の古墳の分布からみて、近い将来、発見されると思われる。

奈良時代集落址の存在は今回の発掘調査によって明らかになった。「豆良郷」の存在は平安時代中期頃になって初めて文献によって実証されているが、この古代の郷村は初源を探れば奈良時代まで遡れるわけである。

平安時代承平5年（935）に編纂された『倭名類聚鈔』には「豆良郷」なる名が最初に見られる。「豆良」なる名の由来については「豆良公」と称する帰化人が中坪の奥地「滝の沢川」上流に住んでいたと伝承されており、当地は「大百済毛」「小百済毛」と呼ばれている。これについては諸説が提唱されているが、確たる説は出ていない。

辻西幅遺跡より「王」なる字を墨書にして印した平安時代土師器坏・須恵器坏が竪穴住居址より出土している。この墨書銘の内容からみて、「豆良郷」の存在性がクローズアップされるのである。南垣外遺跡から灰釉長頸瓶と人骨の出土が伝えられている。辻西幅遺跡、南垣外遺跡はともに今回発掘調査した遺跡に近接している。南垣外遺跡から棚沢川に沿って広大な平坦面が展開し、この西端部がかの有名な福島遺跡である。近年の研究から福島遺跡、古代の笠原御牧を「豆良郷」に包含する説が提唱されつつ現状であるが、今後の研究が重大な課題となる。

鍛冶垣外遺跡からも平安時代の遺構・遺物の検出が報告書によって分かるのである。

昭和60年度の発掘調査によって、堤林・島崎両遺跡から中世陶磁器類が相当量出土した。前者の遺跡より出土した遺物は次の通りである。古瀬戸灰釉四耳壺（15世紀）、古瀬戸鉄釉稜皿（16世紀前半）、永楽通宝（1枚）。後者の遺跡出土遺物は次の通りである。中津川大平鉢（13世紀）、中国元白磁碗（13世紀）、中国明白磁碗（15世紀）、中国明青磁碗（15世紀）、古瀬戸灰釉大盤（15世紀後半）、古瀬戸鉄釉摺鉢（16世紀前半）、古瀬戸灰釉皿（16世紀中葉）、古瀬戸灰釉丸皿（16世紀前半）、古瀬戸鉄釉壺（16世紀）

以上の出土遺物の実態より鎌倉時代前期から戦国時代にかけての約300年間、城館を中心にして、それを取り巻く農村集落の営みがある程度、確証づけられる。

中国青磁・白磁類は伯来の高級品で、その使用階層からみて、近くにある小松の城、登内の

城との結び付きを究明すべきであろう。一方、大平鉢、摺鉢、大盤、皿、丸皿、甕等々の日常雑器類は中世農村集落の繁栄を物語ってくれるのである。遺物出土量、遺物内容の差によってそれぞれ、集落の栄枯盛衰の変遷が読み取れるのである。

江戸時代に入り、手良地区は千村氏統治の天領に含まれていた。千村氏の代官屋敷は手良の地には無く、岐阜県可児市久々利にあり、現在、千村氏屋敷として史跡保存されている。以上の条件から察し、地域的に見て、陶器類が極めて安易に入手できたのである。従って、島崎遺跡より多量の「瀬戸物」が出土し、このことを実証してくれる一つとなる。

次に島崎遺跡より出土した優品を記す。17世紀代では瀬戸鉄釉摺鉢、志野長石釉皿。18世紀代では瀬戸灰釉細筒形三足香炉、瀬戸御深井釉茶碗、瀬戸灰釉こね鉢、瀬戸灰釉碗。19世紀代では瀬戸鉄釉燈明受皿、瀬戸鉄釉茶碗、瀬戸染付茶碗、伊万里雪輪文茶碗、瀬戸灰釉香炉、志野長石絵瀬戸。

以上のことから江戸時代全般を通しての農村集落の実態が把握できるのである。

大原遺跡の北側に近接して「下手良大日堂」が建てられ、これの入口に当たる東側には近世の五輪塔群が並んでいる。火輪の軒勾配、地輪の縦長状況から見て、江戸時代の建立と想定できよう。

最後に『伊那市寺院誌』によれば「下手良大日堂」について次のように記してある。

一 宗 旨

曹洞宗

二 本 寺

澄心寺

三 本 尊

大日如来坐像（金剛界）（厨子入）

仏身高 43.0cm 台座高 37.0cm（蓮華座）

光 背 金泥舟形

四 堂 宇

トタン葺入母屋造 間口、奥行共に2.7m

（飯塚政美）

例　　言

1. 本書は、平成12年度に実施した農林漁業用揮発油財源身替農道整備事業竜東地区に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は上伊那地方事務所長の委託により伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成12年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文書記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美　　本田秀明

◎図版作製者

- ・遺構及び地形実測図　　飯塚政美　　本田秀明
- ・拓　　影　　　　　　　　飯塚政美　　本田秀明
- ・土器・陶器実測図　　飯塚政美　　本田秀明
- ・鉄製品実測図　　飯塚政美　　本田秀明

◎写真撮影者

- ・発掘及び遺構　　　　飯塚政美　　本田秀明
- ・遺　　物　　　　　　友野良一　　飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。
6. 出土遺物、遺構図面及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

下手良中原遺跡

目 次

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	5
第1節 発掘調査に至るまでの経緯.....	5
第2節 発掘調査の組織.....	5
第3節 発掘調査日誌.....	6
第Ⅱ章 発掘調査.....	9
第1節 調査の概要.....	9
第2節 遺構と遺物.....	9
(1) 奈良～平安時代の遺構と遺物.....	9
第Ⅲ章 所 見.....	26

挿図目次

第1図 地形及び遺構配置図	(袋図)
第2図 第1号住居址実測図(左)・第1号住居址カマド断面図(右)	(10)
第3図 第1号住居址出土遺物分布図	(10)
第4図 第1号住居址出土遺物実測図	(11)
第5図 第2号住居址実測図	(12)
第6図 第2号住居址出土遺物分布図	(13)
第7図 第2号住居址出土遺物実測図	(13)
第8図 第3号住居址実測図	(14)
第9図 第3号住居址出土遺物分布図	(14)
第10図 第3号住居址出土遺物実測図	(15)
第11図 第3号住居址出土遺物実測図	(16)
第12図 第4号住居址実測図(上)・第4号住居址カマド断面図(下)	(17)
第13図 第4号住居址出土遺物分布図	(18)
第14図 第4号住居址出土遺物実測図	(19)
第15図 第4号住居址出土遺物実測図	(20)
第16図 第5号住居址実測図(右)・第5号住居址カマド断面図(左)	(22)
第17図 第5号住居址出土遺物分布図	(22)
第18図 第5号住居址出土遺物実測図	(23)
第19図 第6号住居址実測図(上)・第6号住居址カマド断面図(下)	(23)
第20図 第6号住居址出土遺物分布図	(24)
第21図 第6号住居址出土遺物実測図	(24)
第22図 第7号住居址実測図(上)・第7号住居址カマド断面図(下)	(25)
第23図 第7号住居址出土遺物分布図	(25)
第24図 第7号住居址出土遺物実測図	(26)

図版目次

図版1 遺跡遠景及び発掘調査状況	図版6 遺構
図版2 遺構	図版7 遺構
図版3 遺構	図版8 遺物出土状況
図版4 遺構	図版9 出土遺物
図版5 遺構	図版10 出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった下手良中原遺跡は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成12年7月17日付けで、上伊那地方事務所長小林俊規と伊那市長小坂権男両者間で委託契約書を取り交わす。

平成12年7月18日付けで伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長友野良一両者間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

平成12年11月7日付けで、下手良中原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、下手良中原遺跡埋蔵物発見届についてを伊那警察署長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、下手良中原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長　登 内 孝（平成13年1月25日から）

　　小田切 仁（平成13年1月24日まで）

委員長代理 小坂栄一

委員 小松光男（平成13年1月24日まで）

　　伊藤晴夫（平成13年1月25日から）

　　上島武留

教育長 保科恭治

教育次長 唐沢勇

事務局 酒井俊彦（社会教育課長）

　　伊藤初美（社会教育課長補佐 女性室長）

　　白鳥今朝昭（社会教育係長）

　　斎藤峰子（社会教育青少年係長）

　　飯塚政美（社会教育係）

　　牧田としみ（　　）

事務局 高松慎一（社会教育係）

発掘調査団

団長 友野良一（日本考古学协会会员）

調査員 飯塚政美（
タ
本田秀明（長野県考古学会会员）

タ
高松慎一（上伊那郷土研究会会员）

作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 向山治男 向山泰正
松下末春 小田切守正（敬称略順不同）

第3節 発掘調査日誌

平成12年7月3日（月） 下手良中原遺跡の発掘現場へ発掘機材一式及び測量機材一式、テントを運搬して、テントを建て、各種の機材の整理整頓を実施する。

平成12年7月4日（火） 今回の発掘調査範囲内、棚沢川に面した最南端部の地点を掘り下げるに、黒い落ち込みが発見され、これを第1号住居址と命名して、掘り下げていくと土師器・須恵器が出土した。

平成12年7月5日（水） 第1号住居址を掘り下げていくとカマドは東壁の中央部付近にあった。西側は用地外のため必然的に発掘調査は不可能であった。第1号住居址の北側に黒い方形状の落ち込みが見られ、これを第2号住居址と名付ける。現道をはさんで東側にグリットをいれると二つの落ち込みが見られ、これらを第3号住居址、第4号住居址とする。

平成12年7月6日（木） 昨日、検出され第3号住居址、第4号住居址と命名された二軒の住居址の掘り下げを進めると、土師器・須恵器が相当量出土した。第3号住居址より和銅開珎（銅製）が一枚出土。これらの出土は上伊那地方では初見である。

平成12年7月14日（金） グリット掘りを北へ、北へと進める。

今まで試掘調査であった。

平成12年7月18日（火） 本格的な発掘調査を本日より開始する。北側で住居址が確認され、第5号住居址と命名し、プラン確認につとめる。

平成12年7月19日（水） 前日と同様な作業の続行。



重機にてグリット掘りを進める

平成12年7月21日（金） 第5号住居址の掘り下げを進める。

平成12年7月24日（月） 第3号住居址の掘り下げ、第1号住居址の遺物ドットマップ図、セクション図の完成。

平成12年7月26日（水） 第1号住居址の完成。第2号住居址の掘り下げ。第3号住居址の遺物ドットマップ図の完成。グリット掘りを北へ、北へと掘り進めると方形の黒い落ち込みが発見され、大きさ、形状からして住居址に成り得る条件が完備されているので、これを第5号住居址と決定する。

平成12年7月27日（木） 第2号住居址の掘り下げを進める。

平成12年7月28日（金） 前日と同様な作業の実施。第2号住居址の遺物ドットマップ図の作成。第3号住居址の掘り下げを進行。

平成12年7月31日（月） 第2号住居址の遺物ドットマップ図の完成。第3号住居址の掘り下げを続ける。

平成12年8月3日（木） 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の清掃をして、写真撮影を終える。第3号住居址の遺物ドットマップ図完成。

平成12年8月4日（金） 第3号住居址の実測終了。第5号住居址の掘り下げを進める。

平成12年8月7日（月） 第2号住居址の実測終了及び同住居址の地層断面図をとる。第4号住居址の遺物ドットマップ図作成。第6号住居址の掘り下げを進める。

平成12年8月8日（火） 第4号住居址の遺物ドットマップ図の作成。発掘機材の整備をする。

平成12年8月9日（水） 第1号住居址のカマドのカッティングの実施。第6号住居址の北側に水路を隔てて、住居址が発見され、これを第7号住居址と名を付け、掘り下げを開始する。



住居址を掘り下げる



住居址を掘り下げる

平成12年8月10日（木） 第4号住居址、第5号住居址の遺物ドットマップ図をつくる一方、前日に引き続き、第7号住居址を徐々に掘り下げていく。

平成12年8月11日（金） 第4号住居址、第5号住居址の遺物ドットマップ図の完成。先の二軒の住居址の地層図を取り終える。第7号住居址の骨格部分の掘り下げを完了する。

平成12年8月21日（月） 第5号住居址の実測図完成。第6号住居址の遺物ドットマップ図の作成並びに掘り下げを進める。

平成12年8月22日（火） 第7号住居址の遺物ドットマップ図作成。第6号住居址の掘り下げを継続的に続ける。

平成12年8月24日（木） 第6号住居址、第7号住居址、第4号住居址の掘り下げを実施。

平成12年8月25日（金） 第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址の清掃を済ませ、写真撮影を終える。

平成12年8月28日（月） 下手良中原遺跡の一部埋め戻しを実施する。

平成12年8月29日（火） 第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址のカマドのカッティング、一部分の埋め戻しを実施する。

平成12年8月30日（水） 前日と同様の作業を実施する。第5号住居址、第7号住居址のカマド断面図作成。下手良中原遺跡の埋め戻しをする。

平成12年8月31日（木） 埋め戻しを実施する。

平成12年11月1日（水） 最後の片付けを実施する。

平成12年11月2日（木） 最後の片付けを実施する。本日をもって発掘調査終了

平成12年11月～平成13年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、3月の報告書刊行に努力を払った。

平成13年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

（飯塚政美）

第Ⅱ章 発掘調査

第1節 調査の概要

下手良中原遺跡周辺は農振農用地区内に指定されており、現況は大部分が水田で、一部は転作による畑作が見られた。これらに混じって夾在的に果樹園が展開し、典型的な田園風景をかもし出していた。このような周辺の概要状況であるために、伊那市の穀倉地帯の一翼を担っていると思われる。

遺跡地の発掘調査地点は大部分が現市道の下、今回の拡幅部分は水田となっており、発掘調査を実施するに当たっては、当初、水田造成時に移動した土の状態、埋土の状態を十分に観察、検討して、現地に重機を入れて調査に踏み切った。実際に掘り下げてみると、元来、傾斜の少ない地域のために、前述した二つの造成では、遺構の掘り込み面となり得るテフラ層の移動は極めて少なく、遺構検出への期待は大いに持てた。

限定された調査地域ではあったが、奈良末～平安時代の竪穴住居址 7軒が発見され、古代「豆良郷」の存在性を強く示唆してくれた。なかでも「和銅開珎」の出土は上伊那郡内では初めてであり、注目に値する。詳細な成果は報告書の通りである。

(飯塚政美)

第2節 遺構と遺物

(1) 奈良～平安時代の遺構と遺物

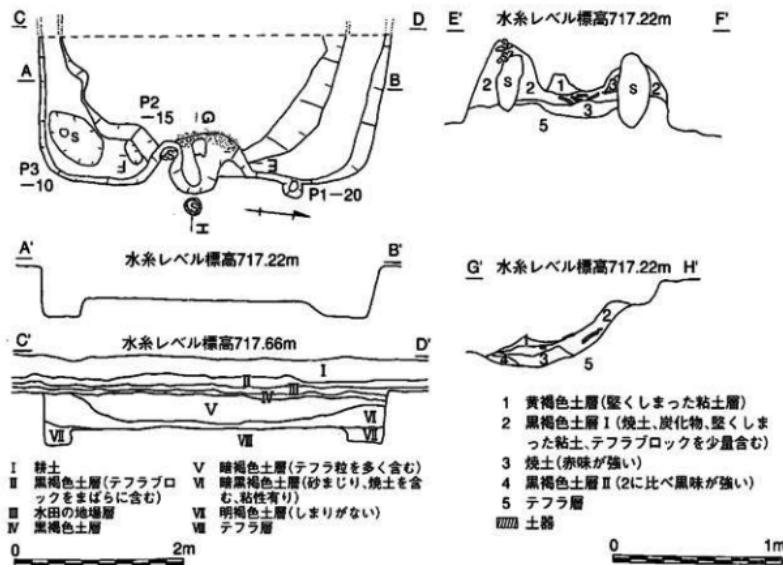
第1号住居址（第2図 図版2）

本址は下手良中原遺跡の南端部付近を西流する棚沢川の北端突端面に検出され、北東に近接して第2号住居址が存在している。表土面より40cm位下がった砂礫混合のソフトテフラ層を見事に掘り込んで構築した隅丸方形状の竪穴住居址である。規模は南北4m40cm位、東西は不明（西側は用地外の為に発掘調査不可能）の数値を測定できる。

壁高は40cm程度と中位であり、垂直に近く、かたく、良好であった。床面は若干の凹凸はあったが堅い叩きで造られており、一部分は貼床が認められた。壁面直下に幅50cm、深さ15cm程度の周溝が見事に回っており、典型的な住居址のパターンを描出していた。

柱穴は住居址の全てが把握できないので、その実態は分からぬが、四隅に大きなののが、一本づつ存在する、いわば四本主柱穴の形態を成していると推定される。カマドは東壁中央部付近の壁面に密着して構築され、南北1m10cm程度、東西1m10cm程度の規模を有し、その組成は石組粘土カマドであった。カマドの残存状態は極めて良好で、両袖石はしっかりと床面に組み込まれて直立していた。煙道の存在も確認でき、焼土の残存度は高かった。

遺物は土師器、須恵器が主流で、その編年からみて、奈良末～平安時代の住居址と想定でき



第2図 第1号住居址実測図(左)・第1号住居址カマド断面図(右)

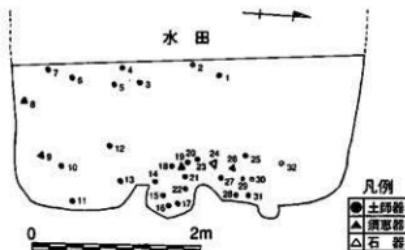
る。

遺物(第3~4図)

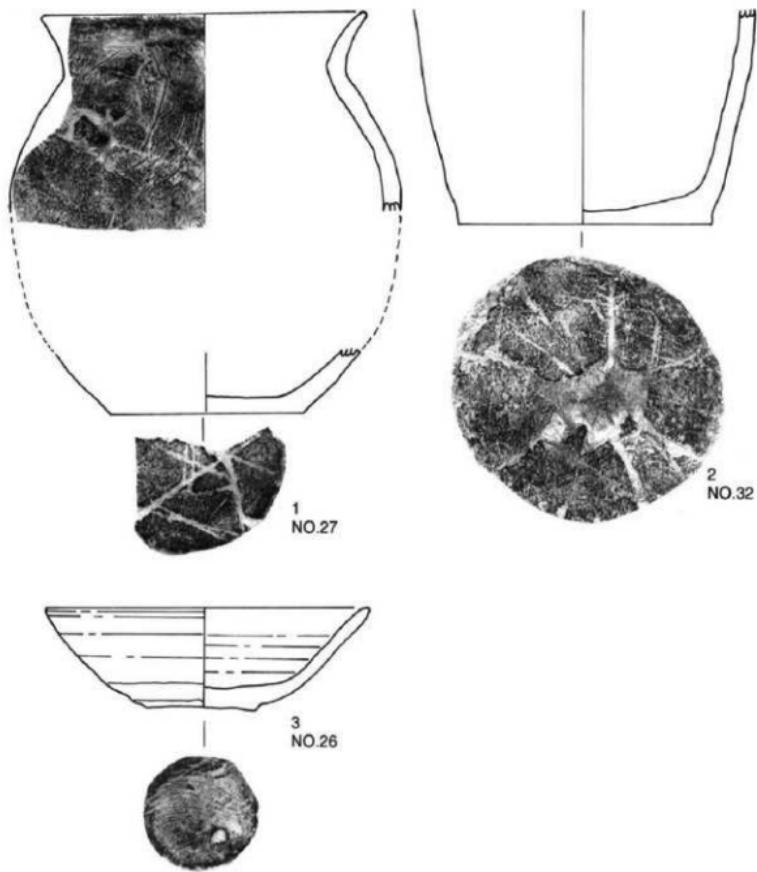
本址は全面発掘が出来なかつたので、本址に関連する遺物の総数は把握できない。発掘調査した段階では土師器、須恵器が大部分であった。

第4図の(1)は図上復元により、口縁径13.3cm、底径7.9cm、器高16.0cmを測る。口縁はくの字状に大きく外反し、胴部に最大径を有する土師器壺である。内・外面ともに無文であるのに対し、木葉底を認める。赤褐色を呈し、焼成は良好。多量の養母粒を含み、ピカピカ輝いていた。(2)は残されている破片からみて、土師器長胴壺の胴下部から底部付近と想定でき、木葉底となっている。色調、焼成、胎土の状態はほぼ(1)と一致する。

(3)は口縁径13.2cm、底径4.6cm、器高4.0cmを測るほぼ完型に近い須恵器壺である。口縁は直線状に外反し、内・外面とともにロクロ痕が顕著にみられる。底部は回転糸切り痕が明瞭で、焼成は極めて緻密で、



第3図 第1号住居址出土遺物分布図



第4図 第1号住居址出土遺物実測図（1：2）

器面に小さな長石粒が各所に存在していた。

第2号住居址（第5図 図版3）

本址は南西で第1号住居址と近接した位置に発見され、表土面から1m10cm位下った砂礫混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築し、プランは隅丸方形状で、竪穴式の住居址である。規模は南北4m85cm位、東西は不明（東側は用地外のために発掘調査不可能）を測り、壁高は北側が高く、西、南側はそれよりやや低かった。前者の数値は50cm程度、後者のは40cm程度に留まった。壁面は垂直気味で、堅く良好であった。

床面は砂質混じりのテフラ層中に構築され、大般水平で堅い叩きとなり、ほんの一部分ではあるが、貼床状の所も認められた。

北壁、南壁、西壁三方向の直下に幅10cm~30cm、深さ15cm~25cm位の周溝が整然とまわっていた。東側を発掘調査すれば当然ながれ、周溝の存在は確かなものとなろう。

柱穴は現段階では9本発見されているが、そのうち本柱穴になりそうなものはP2、P3であり、壁面に沿って存在するP7、P8は母屋柱に成り得る。

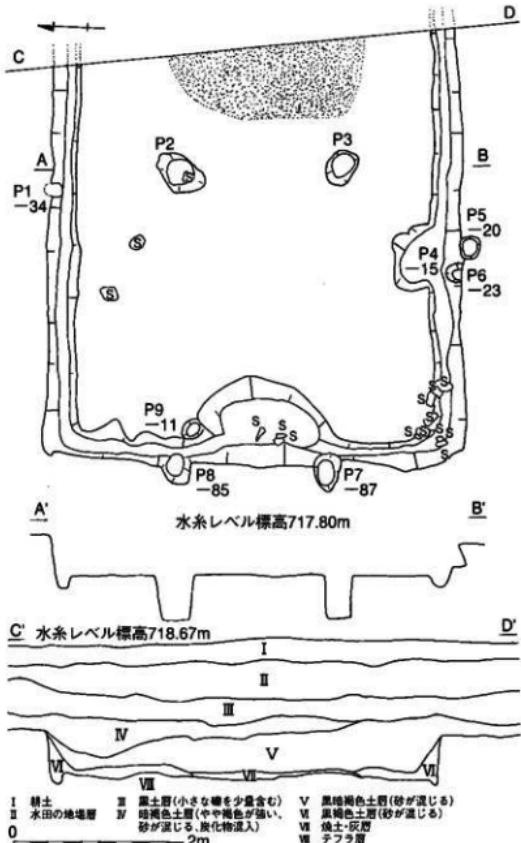
東側に検出された多量の焼土はカマドに付隨するものであり、もう少し東側へ掘り進めばカマドの全貌が明らかになるであろう。

出土遺物は土師器・須恵器が主流で、これらからみて本址は奈良末~平安時代の住居址と思われる。

遺物（第6~7図）

本址の出土遺物は現段階では120点を超えており、全面的に本址を掘り進めれば、その数は150点を超えることは目に見えるようである。これらのうち、大部分が土師器・須恵器であり、本址の時期決定に大いに役立っている。

第7図（1~2）は須恵器高台付壺である。（1）は口縁径11.9cm、底径8.6cm、器高3.8cmを測る。やや外反し、ややハの字状に聞く低い高台で、その先端はフラット気味である。内・外面ともロクロ痕が顕著である。やや黒っぽい胎土で、焼土は良好。（2）は口縁径9.8cm、底径6.5cm、器高4.0cmを測る。やや外反し、口唇部に向かって薄くなっていく。ややハの字状に聞く高台で、その頂部は平坦を呈し、（1）とは若干の時間差があると思われる。黒味がかつ



第5図 第2号住居址実測図

た胎土で、堅く焼きしまっている。
ロクロの整形が内面は顕著である。

(本田秀明)

第3号住居址（第8図 図版3）

本址は今回発掘調査を実施した下手良中原遺跡のうちで単独状態の姿で検出され、表土面より50cm程度下層の砂礫混合ソフトテフラ層を掘り込んで構築した隅丸方形状プランを呈する竪穴住居址である。

規模は南北6m45cm程度、東西は不明（東側は道路敷予定外のため発掘調査是不可能である）が測定可能であった。この規模はこの時期、つまり奈良末～平安時代としてはやや大型の部類に含まれると思われる。

床面は全体的に水平で、堅い叩き状を呈していた。

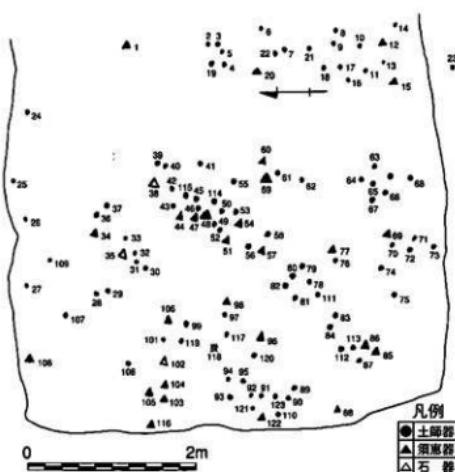
ほんの部分的には

あったが、貼床の状態も確認できた。今回、検出された南壁、北壁、西壁それぞれ直下に幅40cm～50cm程度、深さ35cm～40cm程の幅広ろで、やや深めの周溝が回わり、その底部は堅く、若干凸凹が存在していた。

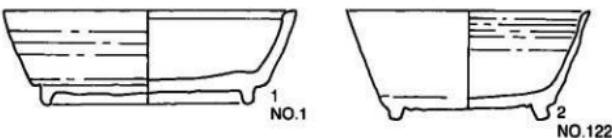
西壁中央部付近の壁面直下に南北1m程度、東西75cm程度、深さ40cm程度の円形状のピットが確認された。（第8図ではP5と標示してある。）このピットの（南側と北側の）周辺には小ブロック単位での粘土塊が色々と光沢を放って多量に貼り付いていた。また、ピット内より多量の焼土と木炭が検出され、何か工房址的な色彩を漂わせている実態が明らかとなった。

柱穴はP2、P3の位置、大きさ、深さからして四本主柱穴と思われ、他の二本は今回、発掘調査が都合によって実施できなかった東側にあると考えられる。カマドもこの東側の一角に存在するものと推定できる。

本址の出土遺物は土師器・須恵器が主流であり、これらによって、奈良末～平安時代の住居址と想定でき得よう。



第6図 第2号住居址出土遺物分布図



第7図 第2号住居址出土遺物実測図（1：2）

遺物（第9～11図）

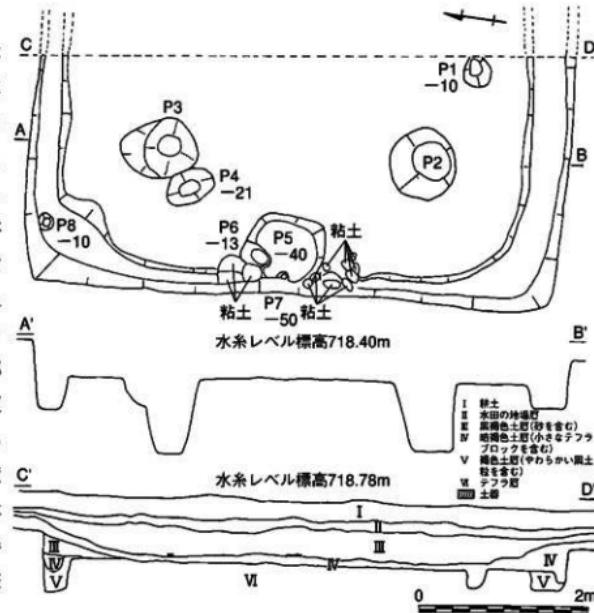
第10図（1～2）は土師器長胴壺の一派に含まれている。（1）は図上復元によって、口縁径31.3cmを測り、口唇部は急激にくの字状に屈折している。黄褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母粒を含む。（2）は胴下部から底部に至る図上復元が可能な破片であり、底径は8.2cm程度を測り、この部分は木葉底を成している。器外面はヘラ削りの調整が顕著で土師器の面目を保っている。赤褐色

を呈し、焼成は良好で、多量の長石と雲母を含んでいる。

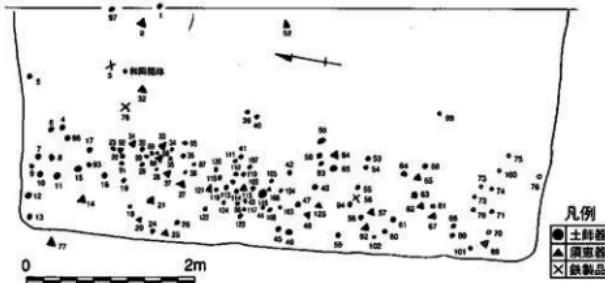
（3）は須恵器壺で、口縁径14.9cm、底径7.2cm、器高4.4cmを測る。器厚は3mm～5mmと極めて薄く製作され、ゆったりと曲線を描きながら外反し、内・外面ともにロクロ痕が顕著である。底面は回転糸切り痕が明瞭となっている。白灰色を呈し、いわば生焼き状態である。

（4）は須恵器高台付壺。ハの字状に開く付高台を有し、その先端部は平坦状を呈している。黒灰色を呈し、焼成は良好で、少量の長石粒を含む。

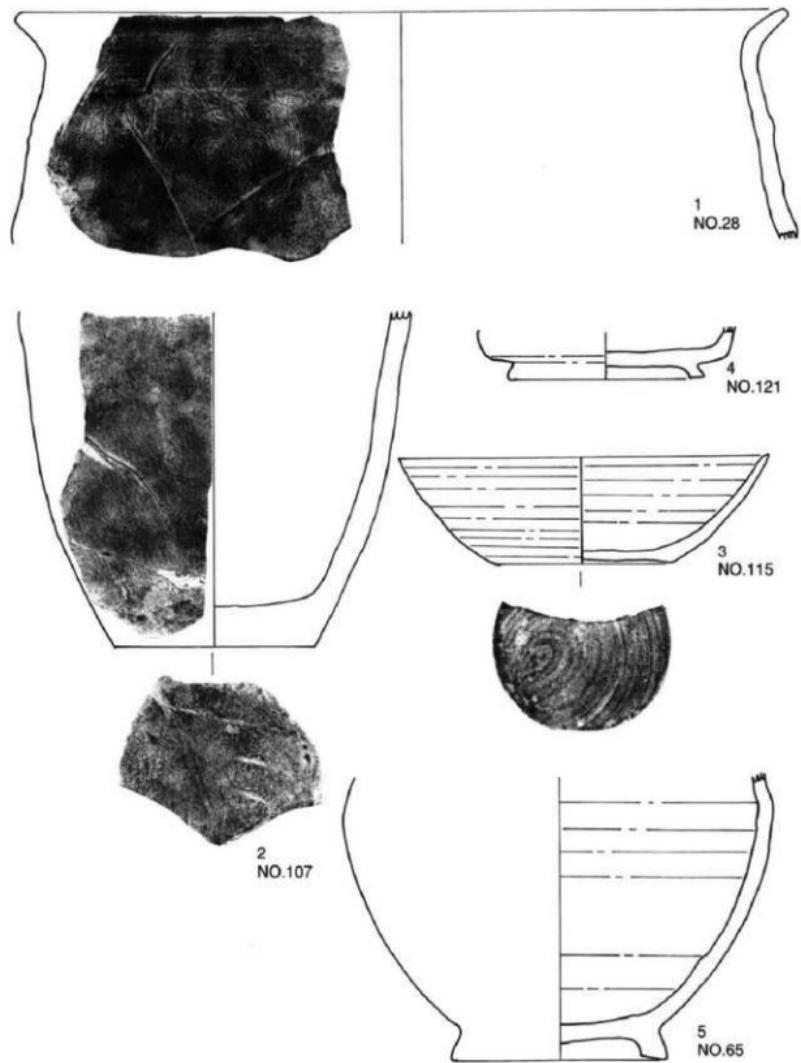
（5）は須恵器短頸壺で、底部は付高台となっている。外面はあばた状に自然釉の痕が見られ、かなり高



第8図 第3号住居址実測図



第9図 第3号住居址出土遺物分布図



第10図 第3号住居址出土遺物実測図 (1 : 2)

温で焼かれた事實を物語つてくれる。ロクロ痕の調整は見事である。

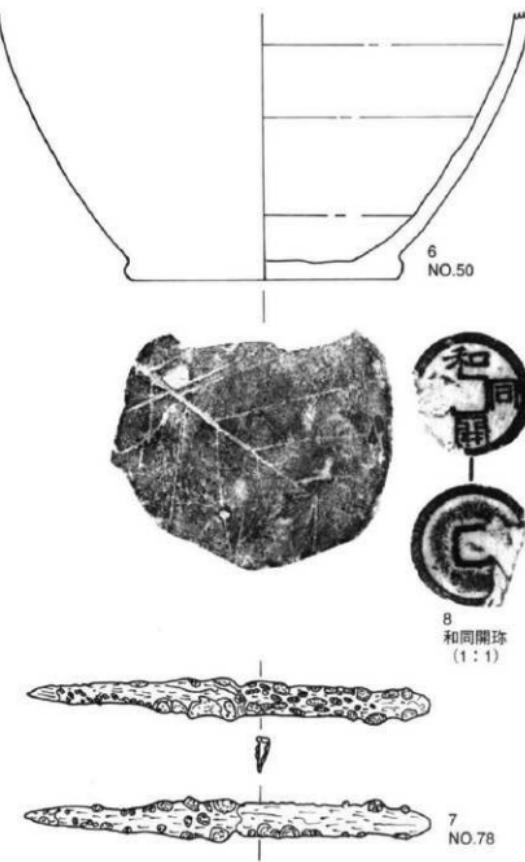
(6) は土師器長胴壺の胴下部から底部にかけての破片ではある。外面の剥落が顕著で、長石粒の白さが目立っている状態である。木葉底の作りは美しく、葉脈の線がくっきりと浮き出ている。赤褐色を呈し、焼成は中位である。

(7) は鉄製の刀子で、全長は16.5cmを測る。腐蝕の進行度が激しく、瘤状に固まった所が多数認められた。かつてはその切り味は鋭かったと想定される。

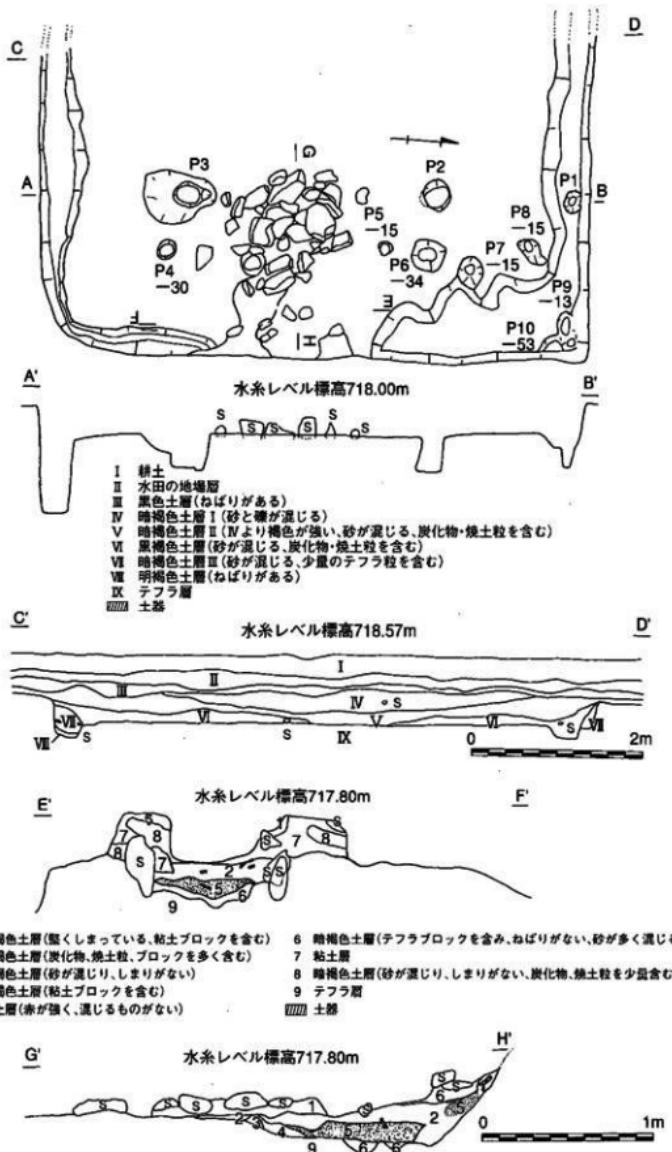
(8) は銅製の新和銅開珎である。拓影で分かるように「珎」の字は欠損しているが、現存している三文字から類推して、和銅開珎と判断できる。直径は25mm、厚さは1.5mmを測る。保存状態が良好で緑青の吹き出しが少なかった。

第4号住居址（第12図 図版4）

本址は現市道の西側に単独状態で発見され、隅丸方形を呈し、表土面より50cm位下の砂礫混じりソフトテフラ層面を掘り込んで構築した堅穴住居址である。規模は南北6m 50cm程度、東西は不明（用地外のために発掘調査が不可能）、壁面は30cm～40cm内外をそれぞれ測る。以上の数値から察して、奈良末から平安時代の住居址としては大型の部類に属すると思われる。今回、検出された三つの壁面、すなわち、東壁、南壁、北壁はともに垂直に近い状態で、極めて堅く、丁寧に造り上げられていた。



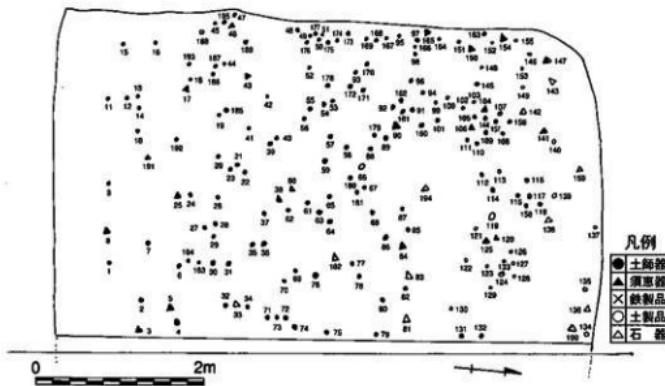
第11図 第3号住居址出土遺物実測図（1：2）



第12図 第4号住居址実測図（上）・第4号住居址カマド断面図（下）

床面は大
般に平坦で
堅い叩き状
になり、極
めて良好な
状態であり
ほんの一部
に貼床が残
っていた。

東壁中央
部付近に設
置されたカ
マド周囲を



第13図 第4号住居址出土遺物分布図

除いて、東壁、南壁、北壁の三壁面直下に周溝が蛇行状にめぐっていた。柱穴に関しては住居址の全体像が把握できないので、配置状態は分からぬが、P2、P3は主柱穴に、P1、P4、P5、P6、P7、P8、P9、P10等々は補助穴となり得そうであり、後者のは間切り的な要素を含んでいると推定できる。

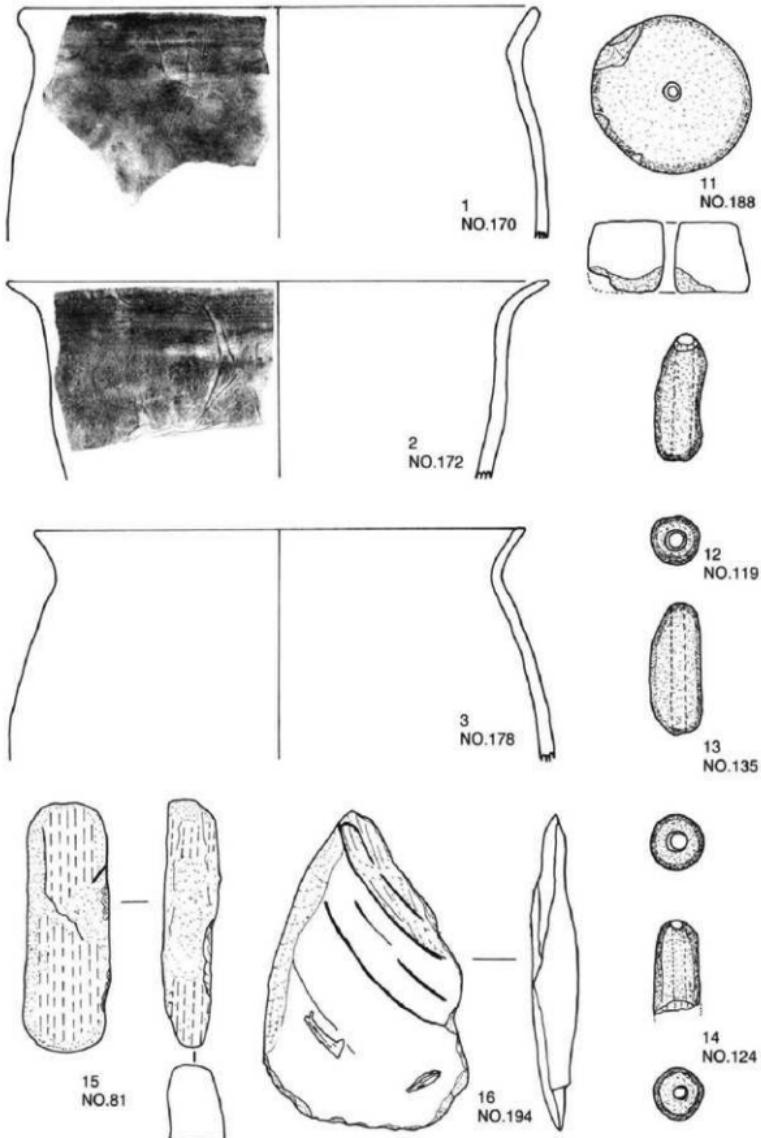
東壁中央部付近に築かれた石組粘土カマドの残存状態は良好で、両袖石はしっかりと組み込んであり、本住居址にふさわしい大きなカマドとなっていた。

遺物は土師器、須恵器が主流となっており、その形式からみて奈良末～平安時代の住居址と察せられる。特殊な遺物として管状土錐3点、土製紡錘車1点が出土した。

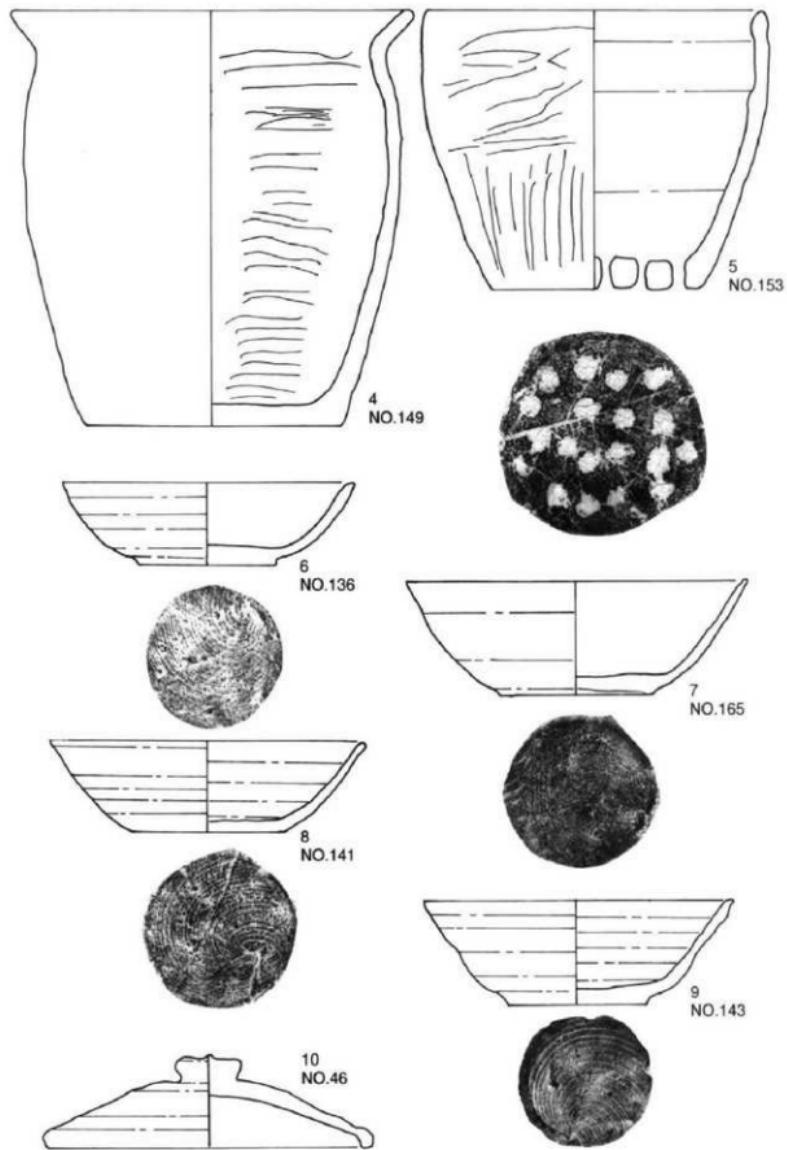
遺物（第13～15図）

第14図（1～3）は土師器壺の口縁部破片で、いずれも図上復元にて表示してある。口縁径（1）は21.1cm、（2）は22.1cm、（3）は19.9cmをそれぞれ測定できるが、口縁部に違いが見られる（1、3）はくの字状に、（2）はハの字状に大きく外反する。3片とも赤褐色を呈し、焼成は良好、多量の雲母を含んでいる。

第15図（4）は口縁径16.4cm、底径10.6cm、器高16.7cmを測り、大きくくの字状に外反する土師器壺の完型品である。外面は素文であるのに対し、内面は横位のカキ目痕が走っている。赤茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含む。（5）は口縁径13.9cm、底径8.6cm、器高11.2cmを測る土師器の完型品に近い瓶である。この器の用途からして今回はカマド近くから出土している。木葉底を呈し、葉柄や葉脈を磨り消すかのようにして円形状の穴をほぼ等間隔に穿けてある。赤褐色を呈し、焼成は中位で、多量の長石を含んでいた状態が剥落した器面から読み取れる。



第14図 第4号住居址出土遺物実測図 (1 : 2)



第15図 第4号住居址出土遺物実測図 (1 : 2)

第15図（6～9）はいずれも須恵器で、ロクロ痕を美事に残す優品である。この四つとも半完成品の様相を呈しているが図上復元が可能であり、それに基づく数値を記しておく。（6）は口縁径11.9cm、底径5.7cm、高さ3.3cm。（7）は口縁径13.9cm、底径6.2cm、高さ4.6cm。（8）は口縁径12.9cm、底径6.3cm、高さ3.7cm。（9）は口縁径12.6cm、底径5.7cm、高さ4.3cm。底部は四個とも回転糸切り痕が明瞭であって製作工程が理解できる。一方、口縁はともになだらかにハの字状に開き、外反している。（6～7）は白灰色を呈し、生焼き状態であるのに対し、（8～9）は灰黒色を呈し、緻密となっている。

同図（10）は生焼き状態の須恵器蓋の完成型であり、つまみ頂部は全体的に凹み状、中心部にわずかに突出が見られる程度である。底縁径13.3cm、つまみの径2.4cm、つまみの高さ1.1cmを測る。

第14図（11）は直径6.4cm、高さ2.9cmを測る土製紡錘車で、中心部付近に直径7mmの孔をきちんと穿いてある。直径の数値に対し、高さの数値割合が大きい。このことは何か時期的な特徴と判別してもよからう。（12～14）は継長の管状土錐であり、（12～13）は完成型、（14）は下端部の一部分を欠損している。重量を計測してみると（12）は20g、（13）は23g、（14）は17gとほぼ均一化されていた。いずれも赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。

（15）は頁岩製の砥石で、研磨痕が継位に存在している、（16）は硬砂岩製の剥片石器の一部で、形態からみて本住居址とは何ら関係がなく、後世の飛び込みであろうと思われる。

第5号住居址（第16図 図版5）

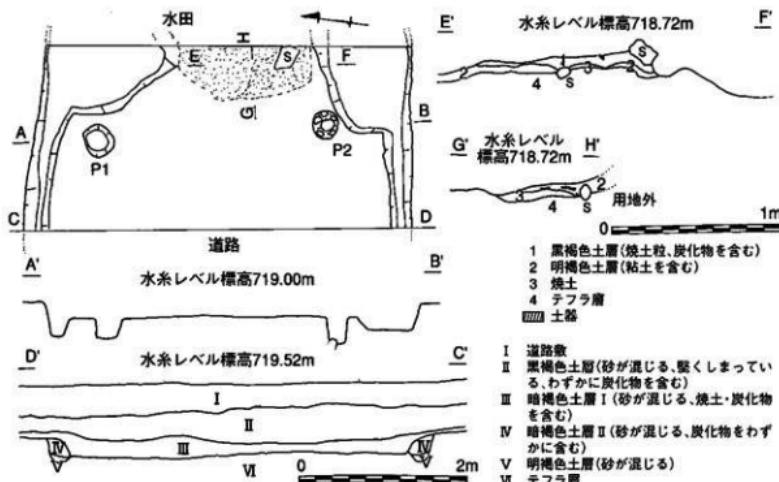
本址は今回の発掘調査地区内で大般中央部付近に、北側は第6号住居址に近い地点に検出され、表土層面から60cm程度下った砂質混入のソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址で、平面プランは東側が用地外、西側は舗道道路のために調査は実施できなかつたが、検出された部分、また、周囲の住居址の実態からみて隅丸方形形状を呈すると想定される。

規模は南北4m50cm位を持っているが、東西に関しては前述した事由によってその数値は算出できなかつた。壁高は検出された南壁で25cm位、北壁で20cm位をそれぞれ測定でき、壁高としては普通の高さであった。両壁面ともに外傾気味で、若干凹凸を認め、堅かつた。

柱穴は現段階では2本検出されたが、全体的に4本主柱穴と考えられ、したがつて、P1、P2は主柱穴としての位置づけが可能であろう。P2の中に細縫をつめてあり、柱の支えとなつていた。

床面は部分的に凹凸はあるが、全般的にはかたい叩きを成しており、ほんの極一部分ではあるが貼床が残存していた。検出された両壁面直下に周溝がみられたが、全面的な発掘調査を実施すれば全周していると思われる。カマドは東壁中央部付近に検出され、当初は石組粘土カマドの形態を保持していたが、現況は大部分破壊されてしまって、その姿ははっきりとしない。ただ、多量の焼土が堆積しており、かつて、その存在性が裏付けできるのである。

出土した遺物は大部分が土師器、須恵器であり、それらからみて奈良末～平安時代の住居址



第16図 第5号住居址実測図(右)・第5号住居址カマド断面図(左)

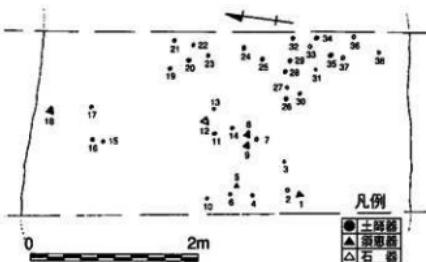
であろう。

遺物 (第17~18図)

第18図(1)は長胴壺の口縁部破片であり、図上復元によって口縁径25.6cmを測る。内・外面全体にわたって無雜作にカキ目を施してある。煮沸に使用したとみえて、外面に多量の煤が附着して、黒々状態である。赤褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は良好である。

第6号住居址 (第19図 図版6)

本址は今回の発掘調査地区では最北端部に位置し、南側で第5号住居址、北側で第6号住居址に接した場所に発見された。西側は舗装道路下に広がっており調査不可能。表土層面から45cm程度下の砂を多く含んだテフラローム層を掘り込んで構築されており、検出された南東、北東の二隅の状態からみて、隅丸方形の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北3m45cm位(東西は前述した理由により不明)を測る。当然ながら南北規模の数値より類推して東西規模の大体は推定でき得て、一辺が3m50cm程度と成り、これは、奈良末~平安時代の住居址としては小型の部類に属する。



第17図 第5号住居址出土遺物分布図

壁高は30cm～50cm位とやや高めであり、垂直に近く、良好であった。

床面は大般平坦で堅かった。東壁中央部付近に構築された石組粘土カマド周辺を除いて東壁、南壁、北壁の三壁面直下に蛇行状に周溝があり、特に隅にいたってはやや幅広くなっていた。

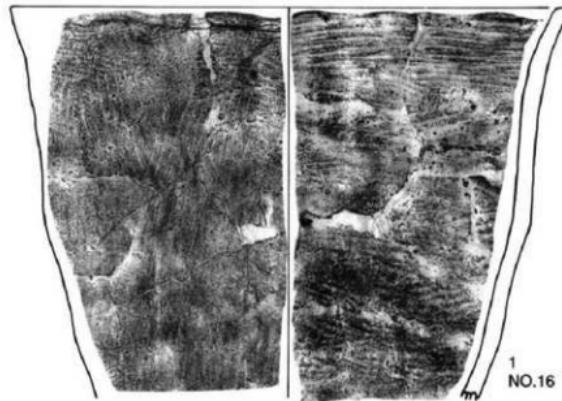
現段階で柱穴は3本確認されたが、本址の全体像が掌握出来ないので、その配置状態は不明である。

カマドの内容は前述した通りである。残存状態は良好で両袖石、支脚石はしっかりとしていた。カマドの芯になる多量の石が認められ、これは三峰川産の緑色岩や変成岩が主であった。

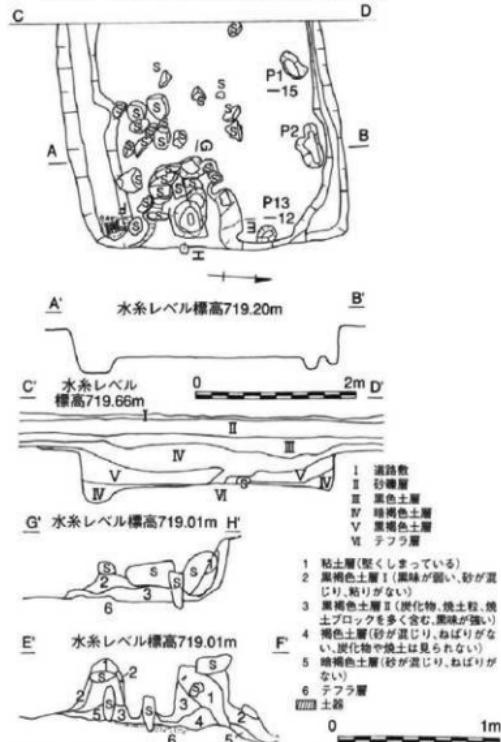
遺物は土師器、須恵器が主流を成しており、それらの編年からみて、本址は奈良末～平安時代の住居址と位置づけが可能と思われる。

遺物（第20～21図）

第21図（1）は土師器塊で、丸底状を呈する器形に近いと思われ、口縁部直下にわずか



第18図 第5号住居址出土遺物実測図（1：2）



第19図 第6号住居址実測図（上）・第6号住居址カマド断面図（下）

に棱を有し、口唇は丸味を呈す。図上復元ではあるが、口縁径11.2cmを測る。赤茶褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は中位である。(2)は土師器長胴甕の木葉底を有する底部破片であり、葉柄や葉脈が拓影からも分かる。赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好である。

(3)は須恵器坏で、図上復元によって口縁径11.8cm、底径5.9cm、高さ4.2cmが計測できる。口縁部へ向かってやや緩傾斜に外反し、回転糸切底を有する。白灰色を呈するいわば生焼き状態となっている。内・

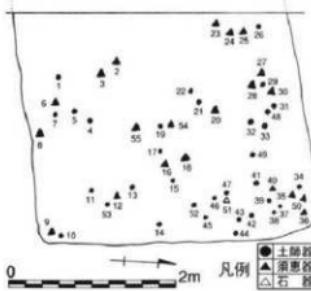
外面ともにロク
口痕が顯著で、
調整がゆきとど
いている。

全般的にみて
本址は前述した
ように小型の部
類の住居址に含
まれているが、
その割に遺物の
出土量が多めで
あり、今後、何
か問題提起をし
てくれるであろ
う。類例を待ち
たい。

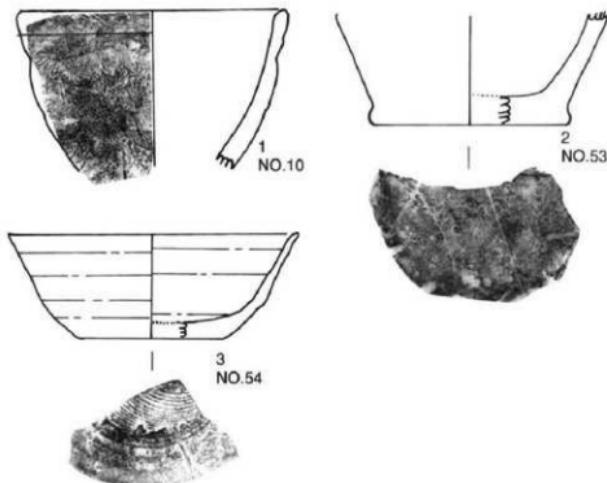
第7号住居址(第22図 図版7)

本址は今回、発掘調査を実施して検出された遺構中、最北端に位置し、南側は第6号住居址と近接して発見され、表土面より40cm位下った砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築した竪穴住居址で、検出された二つの隅からみて、隅丸方形状の平面プランを呈するものと思われる。規模は南北3m30cm程度、東西は西側が塗装道路になっており、調査ができる状況下にある。しかし、東西規模は住居址の形態から察して南北規模の近似値を示すと思われる同時に、この数値は奈良末～平安時代の住居址としては小さい方に分類できると思われる。

壁高は30～40cm位の数値を示し、状態は垂直に近く、堅くしまっていた。



第20図 第6号住居址出土遺物分布図



第21図 第6号住居址出土遺物実測図(1:2)

床面は大般水平で、堅く踏み固められていた。柱穴は現況で8本確認されたが、柱穴自体の直径は小さい。壁面に沿ってほぼ等間隔に配置されており、同様のことが、西側の未調査部分にも見られるであろう。

カマドは東壁中央部付近に構築された石組粘土カマドであり、残存状態は不良であったが、煙道が検出されたのは良い成果となった

出土遺物は土師器、須恵器が主流であり、それらの形態から察するに本址は住居址と思われる。

遺物（第23～24図）

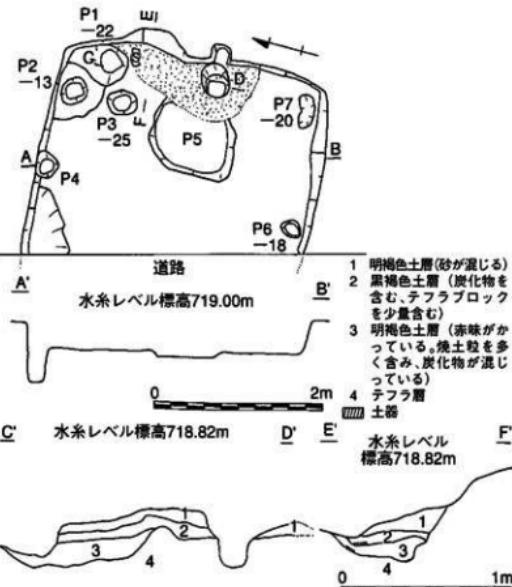
第23図（1～2）は土師器長胴壺の破片であるが、図上復元

が可能だったので実測図を作成してみた。（1）は口縁径24.7cmと大型で、口唇部は丸味を呈し、なだらかに外反し、脇部で最大径26.8cmを測る。外面はカキ目が全面に施されて美的感覚を描写しているが、内面は全くの無文地である。外面に煮沸時に付着したと思われる煤が黒々と見られる。黒褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は中位である。

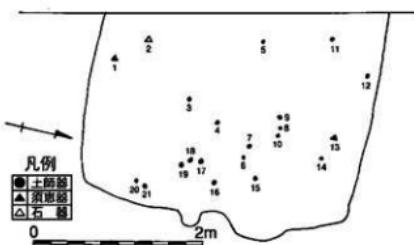
（2）は長胴壺の脇部から底部に及ぶ破片であり、図上復元により底径は10.9cmを測る。外面はカキ目が縱位状に施され、内面は無文地となっている。赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好である。

（3）は両面と先端部に磨いた痕跡が見られ、いわば砥石的用途を持っていたのであろう。三峰川産の緑色岩で、上部のくびれた部分を握って使用したのであろう。

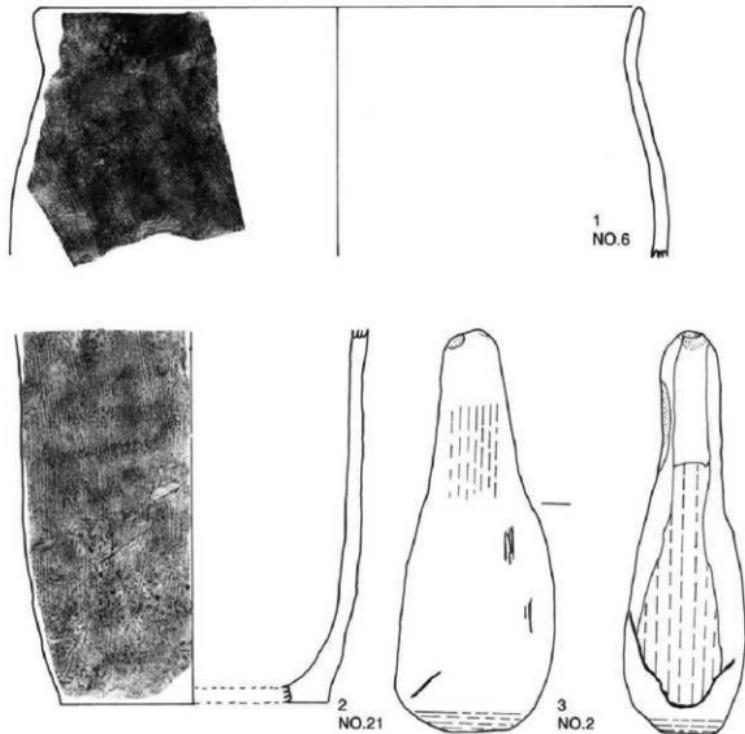
（飯塚政美）



第22図 第7号住居址実測図（上）・第7号住居址カマド断面図（下）



第23図 第7号住居址出土遺物分布図



第24図 第7号住居址出土遺物実測図（1：2）

第Ⅲ章 所 見

下手良中原遺跡の発掘調査は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財の記録保存による緊急発掘調査である。本報告書は平成12年度内に刊行する義務があり、従つて実測図及び図版を主に報告し、考察は後日にゆずることとした。本報告書をまとめるにあたって、充分なる時間を費やせなかった。

今回の調査範囲は現道の拡幅だけの限定された範囲であったにもかかわらず、奈良末～平安時代の竪穴住居址7軒が検出されたが、住居址自体はほんの一部分だけの調査に留まった。

検出された部分より住居址の全体像を想像してみる。住居址7軒は大小様々な規模を有し、共に隅丸方形状の竪穴住居址である。カマドに関しては、それが検出された第1号住居址、第

4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址の全ては石組粘土カマドを構築してあった。カマドの位置は東壁に設置されたのは第1号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第7号住居址、西壁に設置されたのは第6号住居址であった。

検出された7軒のうち、第4号住居址は一辺が6m50cm程度と、大型化を呈しており、今回発掘調査を実施したうちでは中心的な存在を成していると思われる。

遺構に付随した遺物を遺構ごとに列記しておく。第1号住居址は土師器、須恵器、石器を出土。主なものは土師器壺、土師器長胴壺、須恵器壺。第2号住居址は土師器、須恵器、石器を相当量出土した。主なものは須恵器高台付壺。第3号住居址は土師器、須恵器、鉄製品、銅製の和同開珎が出土。主なものは土師器長胴壺、須恵器壺、須恵器高台付壺、須恵器高台付短頸壺、鉄製刀子。第4号住居址は土師器、須恵器、鉄製品、土製品、石器が出土した。主なものは土師器壺、土師器甌、須恵器壺、須恵器蓋、土製紡錘車、管状土錐、砥石、剥片石器。第5号住居址から土師器、須恵器、石器が出土。主なものは土師器長胴壺。第6号住居址の主な出土遺物は土師器、須恵器、石器であり、特徴的なものとして土師器壺、土師器長胴壺、須恵器壺などがある。第7号住居址からは土師器、須恵器、石器が出土し、その主なものは土師器長胴壺、砥石などである。以上の点を踏まえてみると『倭名類聚鈔』に記載されている「弓良郷」の存在性を強く示唆してくれる。なかでも「和同開珎」の出土はこの郷の存在性及び意義付をより実証化してくれ、古代郷村制研究に飛躍的な役目を果たしてくれるであろう。

(飯塚政美)

長野県内古代銭出土一覧

種類	遺跡	遺構	所在地	保管者	文献	備考
高年通背			中野市	江本庄一部		中世偏密銭に混入
隆平永背			中野市	江本庄一部		中世偏密銭に混入
神功開珎	西条・岩船遺跡群	土坑	中野市	中野市教育委員会		中世偏密銭に混入
富得神寶	屋地遺跡	B1号堅穴住居址	長野市	長野市教育委員会	長野市教育委員会1990	
富得神寶	御所遺跡		長野市	長野市教育委員会		
承和通背	龍ノ井遺跡群	SB7404	長野市	長野県教育委員会	長野県組織文化財センター1997	
長年大齊	板田遺跡	遺構外	長野市	長野県教育委員会	長野県組織文化財センター1999	
鐵益神寶	板田遺跡	SD47	長野市	長野県教育委員会	長野県組織文化財センター1999	
貞觀永背	松原遺跡	SD1173	長野市	長野県教育委員会		
延喜通背	松原遺跡	SB196	長野市	長野県教育委員会		
和同開珎	生仁遺跡	第2地点	更埴市	更埴市教育委員会	長野県史刊行会1982	
和同開珎	生仁遺跡	第2地点	更埴市	更埴市教育委員会	長野県史刊行会1982	
和同開珎	源訪南沖遺跡		更埴市	更埴市教育委員会	直井1997	
隆平永背	更埴糸理遺跡	9世紀面	更埴市	長野県教育委員会		
和同開珎	匂分寺周辺遺跡	包含層	上田市	長野県教育委員会		
和同開珎	信濃國分寺	西廻廊	上田市	上田市教育委員会		
和同開珎	嚴田遺跡	グリット	上田市	上田市教育委員会	上田市教育委員会1986	
和同開珎	严田遺跡	H152堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1989	
和同開珎	中造遺跡	H1号堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1972	
神功開珎	栗毛坂B遺跡	遺構外	佐久市	長野県教育委員会		
隆平永背	下鹿鳴遺跡	H45号堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1992	
富得神寶	高師町遺跡	H4号堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1997	
和同開珎	聖原遺跡		佐久市	佐久市教育委員会		
神功開珎	聖原遺跡		佐久市	佐久市教育委員会		
隆平永背	聖原遺跡		佐久市	佐久市教育委員会		
富得神寶	聖原遺跡		佐久市	佐久市教育委員会		
承和通背	聖原遺跡		佐久市	佐久市教育委員会		

種類	道路	道構	所在地	保管	文獻	備考
和同開跡	芝宮遺跡群	SD03	佐久市	長野県教育委員会		
神功開寶	芝宮遺跡群		佐久市	長野県教育委員会		
神功開寶	上ノ城遺跡		佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1974	
富岡神寶	上久保田向遺跡	H25号堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1994	
承和晶寶	上久保田向遺跡	H26号堅穴住居址	佐久市	佐久市教育委員会	佐久市教育委員会1994	
和同開跡	中原遺跡群	7号堅穴住居址	佐久市	長野県教育委員会	佐久市教育委員会1996	
萬年通寶	中原遺跡群	29号堅穴住居址	佐久市	長野県教育委員会		
雞平永寶	大塚原遺跡	20号堅穴住居址	小諸市	小諸市教育委員会	小諸市教育委員会1994	
富岡神寶	竹花遺跡	遺構外	小諸市	小諸市教育委員会	小諸市教育委員会1994	
和同開跡	鷺土遺跡	遺構外	小諸市	長野県教育委員会		
萬年通寶	十二遺跡	H28号堅穴住居址	御代田町	御代田町教育委員会	御代田町教育委員会1988	
神功開寶	野火付遺跡	H13号堅穴住居址	御代田町	御代田町教育委員会	御代田町教育委員会1985	
雞平永寶	御岸遺跡	H18号堅穴住居址	御代田町	御代田町教育委員会	御代田町教育委員会1989	
益世神寶	御岸遺跡	H13号堅穴住居址	御代田町	御代田町教育委員会	御代田町教育委員会1989	
和同開跡	宮本の神社東側		明科町			
萬年通寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
萬年通寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
萬年通寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
萬年通寶	下神遺跡	SK594	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
神功開寶	下神遺跡	SD106	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
不明	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
不明	下神遺跡	SK490	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1990	地盤行為
雞平永寶	飛町遺跡		松本市	松本市教育委員会		
富岡神寶	三間沢川左岸遺跡	16号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
延喜通寶	三間沢川左岸遺跡	161号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会		6枚漆器
富岡神寶	小池遺跡	59号堅穴住居址	松本市	松本市教育委員会	松本市教育委員会1991	
寛平大寶	一ノ屋遺跡	鉢跡	松本市	松本市教育委員会	松本市教育委員会1997	
延喜通寶	川西間田遺跡	溝址	松本市			
富岡神寶	吉田川西遺跡	159号堅穴住居址	松本市	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター-1989	
雞平永寶	丘中学校遺跡	魔芋中	塙尻市	塙尻市教育委員会	塙尻市立博物館1997	
萬年通寶	小沼田遺跡	理納鐵	塙尻市	塙尻市立博物館1997	中世鎧寄鐵に混入	
和同開跡	吉田吉宮遺跡	理納鐵	塙尻市	塙尻市立博物館1985		
富岡神寶	吉田吉宮遺跡	理納鐵	塙尻市	塙尻市立博物館1985		
雞平永寶	下城沢遺跡	21号堅穴住居址	塙尻市	塙尻市教育委員会	塙尻市立博物館1985	
雞平永寶	坂岸外遺跡		岡谷市	岡谷市教育委員会		
雞平永寶	金山東遺跡	藏骨器(蓋)	岡谷市	岡谷市	岡谷市1973	
和同開跡	一の釜遺跡	一の釜古墳	下諏訪町			
和同開跡	乞食塙古墳	石室内	茅野市	茅野市	茅野市1986	
和同開跡	乞食塙古墳	石室内	茅野市	茅野市	茅野市1986	
和同開跡	乞食塙古墳	石室内	茅野市	茅野市	茅野市1986	
神功開寶	乞食塙古墳	石室内	茅野市	茅野市	茅野市1986	
貞觀永寶	飯田城遺跡	38号堅穴住居址	飯田市	飯田市教育委員会		
和同開跡	恒川遺跡群田中	44号堅穴住居址	飯田市	飯田市教育委員会		
富岡神寶	恒川遺跡群田中	2号堅穴住居址	飯田市	飯田市教育委員会		
富本鐵	猪光寺寺地区		飯田市	飯田市教育委員会		
富本鐵	武陵寺古墳	石室内	高森町	高森町教育委員会		
貞觀永寶	田中遺跡	SB05	東都町	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター	
和同開跡	坂畠遺跡	SK016	東都町	長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財センター	
不明	宮平遺跡		上田市			

平成11年7月版

参考文献 長野県埋蔵文化財センター紀要6 西山克己 長野県内出土の皇朝十二鏡(1997年)

図 版



遺跡地を北側より眺む



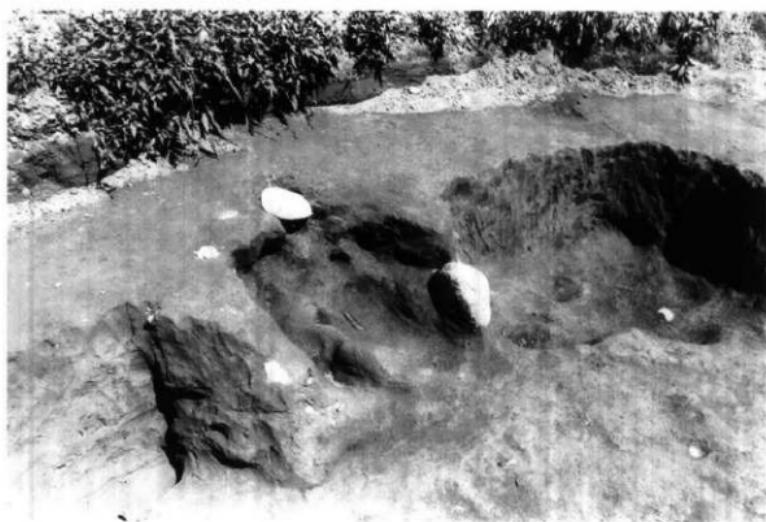
グリット掘りを実施

図版2

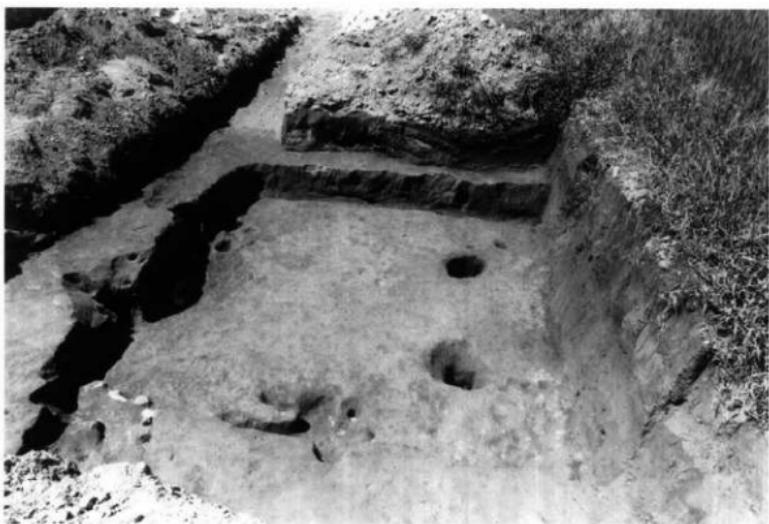
遺構



第1号住居址



第1号住居址カマド



第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第4号住居址カマド



第5号住居址



第5号住居址カマド



第 5 号住居址



第 6 号住居址カマド



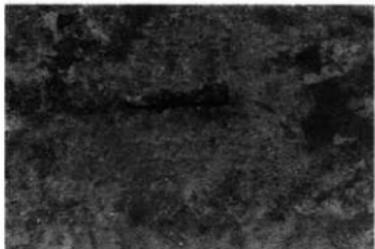
第7号住居址



第7号住居址カマド



和同开珍出土状况（第3号住居址）



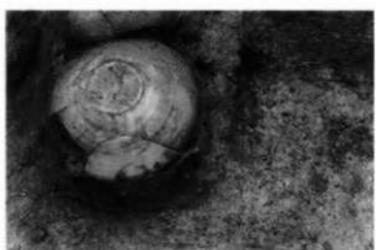
刀子出土状况（第3号住居址）



須恵器出土状况（第2号住居址）



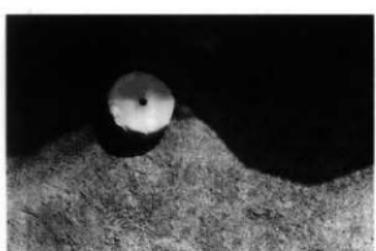
須恵器出土状况（第2号住居址）



土師器出土状况（第1号住居址）



管状土錘出土状况（第4号住居址）



紡錘車出土状况（第4号住居址）



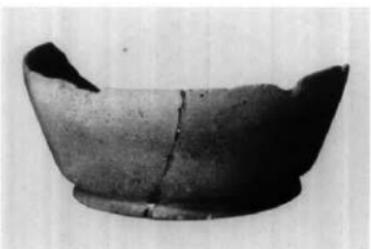
須恵器出土状况（第4号住居址）



土器 (第 1 号住居址 NO32)



须惠器 (第 1 号住居址 NO26)



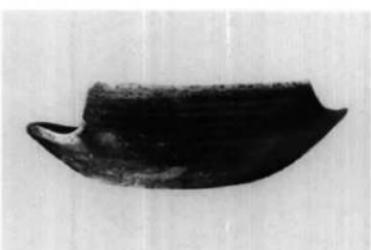
须惠器 (第 2 号住居址 NO1)



须惠器 (第 2 号住居址 NO122)



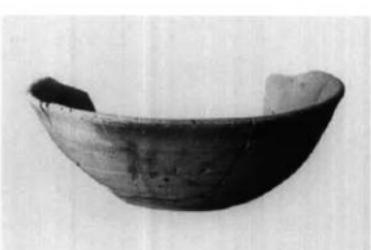
须惠器 (第 3 号住居址 NO65)



须惠器 (第 3 号住居址 NO115)



须惠器 (第 4 号住居址 NO46)



须惠器 (第 4 号住居址 NO165)



土師器（第4号住居址 NO153）



土師器（第4号住居址 NO147）



土師器底部（第4号住居址 NO153）



和銅開坏（第3号住居址）（直径25mm）



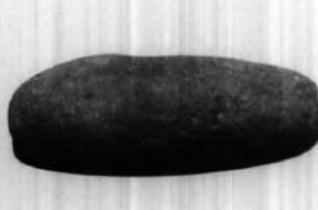
土製紡錘車（第4号住居址 NO188）



管状土錘（第4号住居址 NO119）



管状土錘（第4号住居址 NO124）



管状土錘（第4号住居址 NO135）

報告書抄録

ふりがな	しもてらなかはらいせき						
書名	下手良中原遺跡						
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書						
編著者名	友野良一 飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦2001年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しもてらなかはら 下手良中原	ながのけん いなし 長野県伊那市 おおあざてらなかわおか 大字手良沢岡	伊那市	168		平成12年 7月3日 ～ 平成12年 11月12日	900	農林漁業 用揮発油 税財源身 替農道整 備事業 (竜東地 区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下手良中原	集落址	奈良時代 平安時代	竪穴住居址 7軒	奈良末～平安時代土 師器 奈良末～平安時代須 恵器 奈良末～平安時代土 製紡錘車 奈良末～平安時代管 状土錐 和銅開珎	道路拡張部分の極 めて限定された調査 であったにもかかわ らず奈良末～平安時 代の竪穴住居址が7 軒発見された。なか でも、第3号住居址 より出土した和銅開 珎(銅製)は上伊那地 方では初めてである。 遺跡地周辺は古代 「豆良郷」の一端で あったと考えられて いたが、今回の調査 によって、ある程度 の解明ができるので はないか。		

大原遺跡

目 次

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	5
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	5
第2節 発掘調査の組織	5
第3節 発掘調査日誌	6
第Ⅱ章 発掘調査	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構と遺物	9
(1) 奈良時代の遺構と遺物	9
(2) 奈良～平安時代の遺構と遺物	10
(3) 平安時代の遺構と遺物	16
(4) 時期不詳の特殊遺構	25
(5) その他の遺物	26
第Ⅲ章 所 見	26

擇 図 目 次

第1図 地形及び遺構配置図	(袋図)
第2図 第1号住居址実測図(左)・第1号住居址カマド断面図(右)	(10)
第3図 第1号住居址出土遺物分布図	(10)
第4図 第1号住居址出土遺物実測図	(10)
第5図 第8号住居址実測図(左)・第8号住居址カマド断面図(右上)	(11)
第6図 第8号住居址出土遺物分布図	(11)
第7図 第9号住居址実測図	(12)
第8図 第9号住居址出土遺物分布図	(12)
第9図 第10号住居址実測図(上)・第10号住居址カマド断面図(下)	(13)
第10図 第10号住居址出土遺物分布図	(14)
第11図 第10号住居址出土遺物実測図	(15)
第12図 第2号住居址実測図(上)・第2号住居址カマド断面図(下)	(16)
第13図 第2号住居址出土遺物分布図	(17)
第14図 第2号住居址出土遺物実測図	(18)
第15図 第3号住居址実測図(左)・第3号住居址カマド断面図(右)	(19)
第16図 第3号住居址出土遺物分布図	(19)
第17図 第3号住居址出土遺物実測図	(20)
第18図 第4号住居址実測図	(21)
第19図 第4号住居址出土遺物分布図	(21)
第20図 第5・6号住居址実測図(上)・第5号住居址カマド断面図(下)	(22)
第21図 第5号住居址出土遺物分布図	(23)
第22図 第5号住居址出土遺物実測図	(23)
第23図 第6号住居址出土遺物分布図	(23)
第24図 第6号住居址出土遺物実測図	(24)
第25図 第7号住居址実測図	(24)
第26図 第7号住居址出土遺物分布図	(25)
第27図 第7号住居址出土遺物実測図	(25)
第28図 特殊遺構実測図	(25)
第29図 鉄鎌実測図	(26)

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景及び発掘調査状況	図版5 遺構	図版9 遺構
図版2 遺構	図版6 遺構	図版10 遺物出土状況
図版3 遺構	図版7 遺構	図版11 出土遺物
図版4 遺構	図版8 遺構	図版12 出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった大原遺跡は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成12年7月17日付けで、上伊那地方事務所長小林俊規と伊那市長小坂櫻男両者間で委託契約書を取り交わす。

平成12年7月18日付けで伊那市長小坂櫻男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長友野良一両者間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

平成12年11月7日付けで、大原遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、大原遺跡埋蔵物発見届についてを伊那警察署長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、大原遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委 員 長	登 内 孝	(平成13年1月25日から)
✓	小田切 仁	(平成13年1月24日まで)
委員長代理	小 坂 栄 一	
委 員	小 松 光 男	(平成13年1月24日まで)
✓	伊 藤 晴 夫	(平成13年1月25日から)
✓	上 島 武 留	
教 育 長	保 科 恭 治	
教 育 次 長	唐 沢 勇	
事 務 局	酒 井 俊 彦	(社会教育課長)
✓	伊 藤 初 美	(社会教育課長補佐 女性室長)
✓	白 鳥 今朝昭	(社会教育係長)
✓	斎 藤 峰 子	(社会教育青少年係長)
✓	飯 塚 政 美	(社会教育係)
✓	牧 田 としみ	(✓)

事務局 高松慎一（社会教育係）
発掘調査団
団長 友野良一（日本考古学协会会员）
調査員 飯塚政美（　　タ　　）
タ 本田秀明（長野県考古学会会员）
タ 高松慎一（上伊那郷土研究会会员）
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 向山治男 松下末春
小田切守正（敬称略順不同）

第3節 発掘調査日誌

平成12年9月4日（月） 大原遺跡の南側からバックフォーによってグリット掘りを開始する。

平成12年9月5日（火） グリット掘りを北へ、北へと進めると、4カ所の落ち込みが確認され、これらを南側より第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址と命名して平面プランの精査に努めた結果、どの住居址もみな道路用地外や現舗装道路下にかかっており、その部分の発掘調査は不可能であった。したがって、発掘調査可能な面積は狭く、住居址の全体像は当初より把握できなかった。これもいたしがたい事実として書き留めておく。

平成12年9月7日（木） 午後3時頃より雨降りが強くなってきたので、作業を中止する。本日の主たる作業は第1号住居址、第2号住居址の掘り下げであった。

平成12年9月8日（金） 第1号住居址、第2号住居址を掘り進める。前日の文章に記述した通りの状態なので、掘り下げは午前中にてほぼ完了し、午後より先の2つの住居址の遺物ドットマップ図の作成にとりかかり、第1号住居址はそれの完了の運びとなった。

平成12年9月14日（木） 第2号住居址、第3号住居址それぞれの遺物ドットマップ図の完成をみる。第4号住居址の掘り下げを始める。

平成12年9月18日（月） 第5号住居址、第6号住居址を掘り進める。その結果として前者の住居址は北側の一部分で後者のそれに



住居址を掘り下げる

切られていた。つまり、第5号住居址より第6号住居址の方が新しくなるのである。

平成12年9月20日（水） 第4号住居址の掘り下げを済ませ、同住居址の遺物ドットマップ図の作成。さらに、第6号住居址の掘り下げを進めていく。

平成12年9月21日（木） 第6号住居址の完掘。第7号住居址の掘り下げ開始。第2号住居址、第3号住居址の平面実測完了。第2号住居址、第3号住居址の断面実測完了。

平成12年9月22日（金） 第7号住居址の完掘と第8号住居址の掘り下げを進める。第4号住居址の実測と地層断面図の作成。

平成12年9月25日（月） 第8号住居址、第9号住居址を二軒とも完掘。第5号住居址、第6号住居址の遺物ドットマップ図の作成。

平成12年9月26日（火） 第7号住居址、第8号住居址の遺物ド

ットマップ図作成。さらに先の住居址の平面実測完了。今回の発掘調査で完全に平面プランが把握できた第10号住居址の掘り下げを進める段取りをする。

平成12年9月27日（水） 第10号住居址の中央部付近に南北にベルトを残して、掘り下げを進める。

平成12年10月6日（金） 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址の掃除を済ませて、写真撮影を終える。第6号住居址の遺物ドットマップ図の作成。第7号住居址、第8号住居址のレベルを入れ、実測を終える。

平成12年10月11日（水） 第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址、第10号住居址のセクション図を完成し、最後の住居址のセクションを取り除いて、掘り進める。



住居址を掘り下げる



住居址を掘り下げる

平成12年10月12日（木） 第5号住居址、第6号住居址のセクション図を作成し、さらに実測も終える。第10号住居址の掘り下げを続行する。

平成12年10月13日（金） 第5号住居址、第6号住居址の実測完了。第9号住居址、第10号住居址の遺物 ドットマップ図作成。第10号住居址は昨日と同様な作業を行う。

平成12年10月16日（月） 第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址、第10号住居址をそれぞれ掃除して、写真撮影を終了する。

平成12年10月17日（火） 第1号住居址カマド、第2号住居址カマド、第3号住居址カマド、第5号住居址カマド、第8号住居址カマドのカッティングを終了。そのうち前者の二つのカマドの断面図作成。

平成12年10月18日（水） 第3号住居址カマドの断面実測完了。第9号住居址、第10号住居址の実測終了。特殊遺構の掘り下げ完了。

平成12年10月19日（木） 全測図、第10号住居址実測図、第8号住居址カマドの断面図作成。発掘調査地区的埋め戻しを実施する。

平成12年10月24日（火） 第5号住居址カマド断面図、第10号住居址カマド断面図の作成。発掘調査地区的埋め戻しを進める。発掘機材の後片付け、洗浄をする。

平成12年10月26日（木） 発掘調査地区的埋め戻しを完了。

平成12年11月1日（水） 最後の後片付けを実施する。

平成12年11月2日（木） 最後の後片付けを実施する。本日をもって発掘調査終了。

平成12年11月～平成13年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、3月の報告書刊行に努力を傾注した。

平成13年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

（飯塚政美）

第Ⅱ章 発掘調査

第1節 調査の概要

大原遺跡の土地利用状況は全て水田地帯であり、夏ともなれば稻穂や減反政策によるソバの花が咲き乱れ、あたかもお花畠にいるような景観を呈している。今回の調査は先に触れたように農免道路の拡幅工事事業に伴う理由により、その調査面積は限られ、あたかも「うなぎの寝床」のような状況での調査となった。

調査の結果、奈良時代の竪穴住居址1軒、奈良～平安時代の竪穴住居址3軒、平安時代の竪穴住居址6軒、時期不詳の特殊遺構1基が検出された。これらの住居址は前述したように限定された範囲での調査のため、完掘できたのは第10号住居址だけ1軒のみであった。その他、9軒の住居址の調査面積内訳は第2節 遺構と遺物の中に掲載されているそれぞれの実測図を参考してください。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器がその主流となり、これらの詳細な内容については後述してある。

第2節 遺構と遺物

(1) 奈良時代の遺構と遺物

第1号住居址（第2図 図版2）

本址は大原遺跡の最南端に単独の状態で発見され、表土面より25cm位下がった砂質混じりのソフトテフラ層を掘り込んで構築した竪穴住居址である。プランは四隅が、舗装道路下、あるいは用地外の為に発掘調査は不可能であったが、奈良時代の類例からみて、多分、隅丸方形状を成していると思われる。

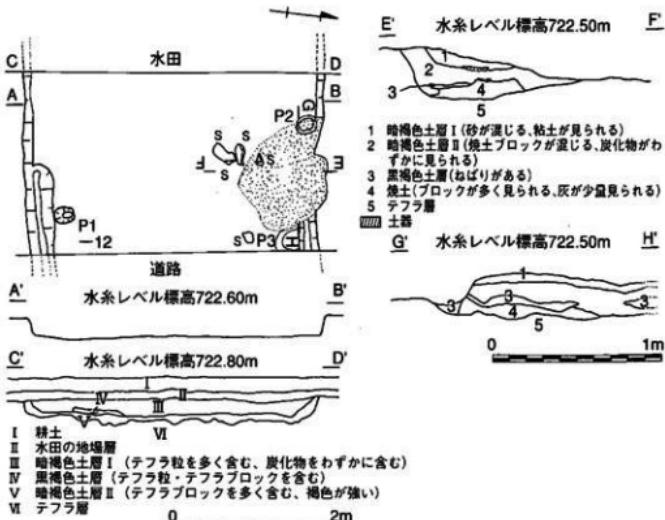
規模は南北3m50cm程度、東西は前述した理由により発掘調査はできない状況下であったが、その規模は住居址の形態から想定して南北の規模と近い数値を測定できると思われる。壁高は低く、20cm位の数値を示し、その状態は軟弱で凹凸が多く、外傾気味であった。床面は堅い叩きになっており、若干の凹凸が認められた。

カマドは北壁中央部付近に検出され、石組粘土カマドの形態を有しているが、大部分は破壊されてしまって、わずかにカマドに使用された河原石3ヶと、多量の焼土塊が見られたにすぎなかった。

遺物は土師器のみで、それによって本址は奈良時代に位置づけられると思われる。

遺物（第3～4図）

第4図（1）は土師器高壺の脚部であり、壺部は欠損している。脚部はハの字状に開く短い



第2図 第1号住居址実測図(左)・第1号住居址カマド断面図(右)

脚部を成し、赤褐色を呈し、焼成は良好である。

(2) 奈良～平安時代の遺構と遺物

第8号住居址（第5図 図版7）

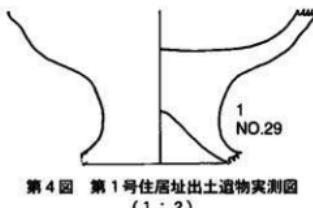
本址は大原遺跡の北端部に位置し、単独の状態で検出された。西側は道路拡幅用地外の為に発掘調査は不可能。表土面より30cm位下がった砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築され、南東、北東の二隅の状態からみて、隅丸方形状の平面プランを呈する竪穴住居址である。

規模は南北4m30cm位、(東西は用地外のため不明)を測る。当然ながら南北の規模からみて、東西規模は大体は想定でき得る。一辺が4m50cm前後と、極く普通の部類に属している。

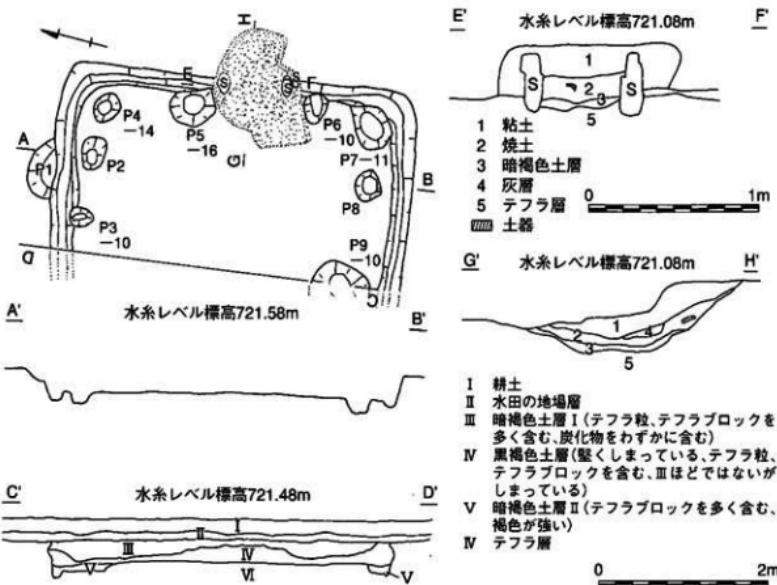
壁高は30～40cmと一般的で、堅く、やや外傾気味を呈していた。床面は大体平坦で堅かった。壁面直下に幅20cm程、深さ10cm程の周溝が見事に回わり、住



第3図 第1号住居址出土遺物分布図



第4図 第1号住居址出土遺物実測図
(1:2)



第5図 第8号住居址実測図(左)・第8号住居址カマド断面図(右上)

居址としての体裁を整備していた。柱穴の数は全面発掘が出来ないので不明であるが、現状ではそれが壁に沿って規則的に配列されている。

カマドは東壁中央部付近にあり、石組粘土カマドの形態を成しているが、大部分は破壊されてしまつて、わずかに袖石2ヶ、多量の焼土塊、粘土塊が残存しているのみであった。遺物は土師器、須恵器が主流で、それらからみて、本址は奈良末～平安時代の住居址と思われる。

第9号住居址(第7図 図版9)

本址は今回発掘調査を実施した最北端部、西側で第10号住居址に接した位置に発見された。表土面より70cm位下った砂質混合のソフトテフラ層面を掘り込んで構築した竪穴住居址で、南西、北西の二つの隅からして、平面プランは隅丸方形形状を呈する。

規模は東側が現舗装道路下に入ってしまつて発掘調査が不能であり、正確なる数値はのぞめないが、南北規模に近似しているであろう。ちなみに南北の規模は4m50cm位を測定で



第6図 第8号住居址
出土遺物分布図

きる。壁高は20cm前後とやや低く、外傾気味で、壁面は軟弱で、凹凸が激しかった。床面は全面的に堅い叩きを呈し、ところどころで凹凸状を成していた。

柱穴の存在及び配置状態は全面的な調査が実施できないから不明である。

カマドは近傍の住居址からみて、東壁中央部付近に構築された石組粘土カマドと想定できる。

遺物は土師器、須恵器が主流で、それらからみて、本址は奈良末～平安時代の住居址と思われる。

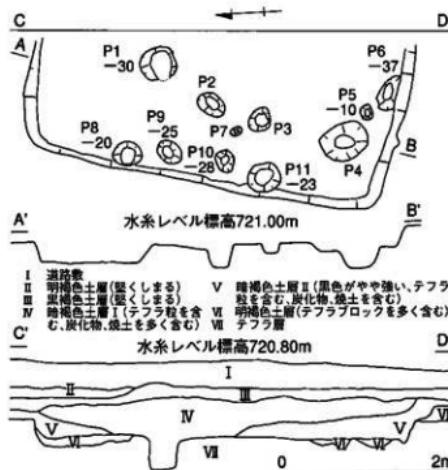
第10号住居址（第9図 図版8）

本址は大原遺跡の最北端、東側は第9号住居址に接して発見され、さらに今回、全面発掘できた唯一の住居址である。表土面より70cm程度下がった砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築し、隅丸方形形状の平面プランを呈する堅穴住居址である。規模は南北4m50cm位、東西4m80cm位を測る。

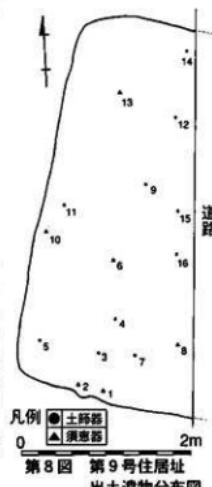
壁高は30～50cm位の数値を示し、その状態は凹凸が多く、外傾気味で、軟弱であった。床面は大般水平で、堅くよく踏み固められ、良好な叩きとなっていた。主柱は数多く検出されたが、四つの隅に存在する大きなピット（P3、P5、P17、P24）が主柱穴となると思われる。いわば四本主柱穴の骨組みを成しており、それに付随して小さな柱穴、P8、P15、P28のように母屋柱の柱穴も存在していた。

カマドは東壁の中央部付近に検出され、石組粘土カマドの形態を成し、残存状態は良好であった。カマド周囲の壁面には補強用の土器片が貼り付けてあり、これらは細片ではあったが、かつては土師器長胴壺に使用されており、廃品回収的にカマド構築に用いられたと思われる。

遺物は土師器・須恵器が主流を占め、それからして本址は奈良末～平安時代の住居址と思わ



第7図 第9号住居址実測図



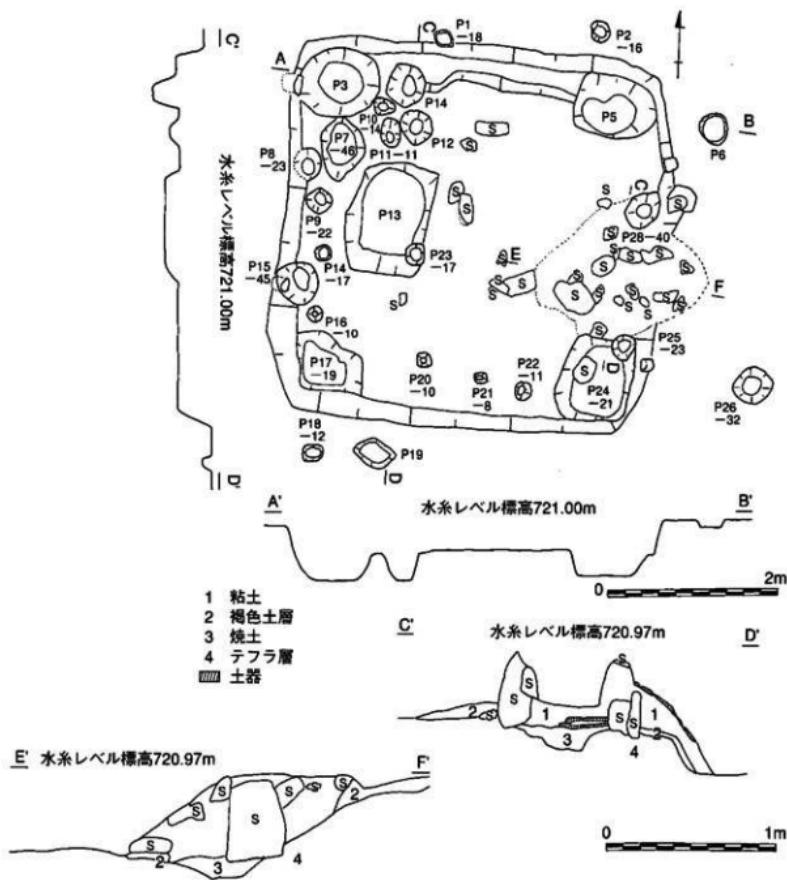
第8図 第9号住居址
出土遺物分布図

れる。

遺物（第10～11図）

第11図（1～2）は土師器内黒坏である。（1）は口縁径16.8cm、高さ5.4 cm、底径6.9 cmを測り、やや大型化を呈している。腰部の張りが少なく、口縁はわずかに弯曲しながら立ち上がる器形を持つ。外面は赤褐色を呈し、回転糸切り底である。

（2）は口縁径13.1cm、底径5.8cm、高さ3.8cmを測る。腰部の張りはほぼ直線的に走りながら立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。外面は赤褐色を呈し、回転糸切り痕を有する。



第9図 第10号住居址実測図（上）・第10号住居址カマド断面図（下）

第11図（3～6）は須恵器坏で、全て回転糸切り底を有している。

(3)は口縁径12.9cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測る。腰部の張りはわずかであるが内側に弯曲しながら立ち上がる形を成す。回転によるロクロ痕が強く残る方法で製作され、所謂は灰褐色を呈する。

(4)は図上復元によって実測図を作成した。それによると、口縁径12.4cm、底径5.8cm、器高3.2cmを測る。腰部はやや張り出し、口縁直下でくの字状に鋭く外反する。灰褐色を呈し、外面に長石粒が全面にわたってあばた状に露出していた。

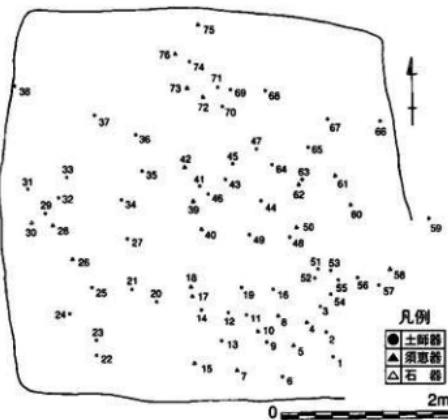
底部は糸切り痕にて調整を施し、さらに両面には回転ロクロ痕を水引きで仕上げた調整方法をとっている。

(5)は(4)と同様に図上復元にて実測図作成を試みている。それによれば口縁径13.1cm、底径5.3cm、器高3.6cmをそれぞれ測定できる。この器の全体的な形を見てみよう。腰部は若干、つぼまり、口縁直下でやや張り出し、口縁はやや外反する。したがって器の均衡性はよく保たれている。器の調整は回転ロクロの痕が、内・外面とも、そのままの形で残存し、底部にいたっては糸切り痕が片寄りの形でそれぞれ残っている。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

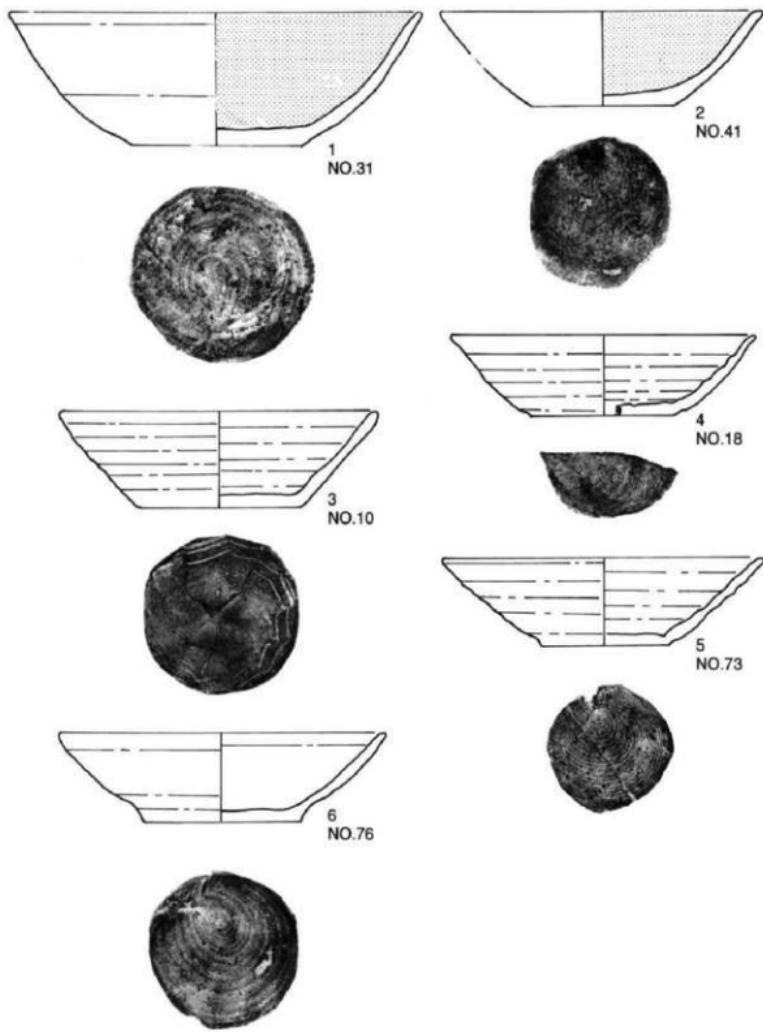
(6)は完成品であって、口縁径13.3cm、底径6.4cm、器高3.6cmをそれぞれ測る。全体の器型は底部上部は大きく内側に弯曲し、胴部はやや外へ張り出し、口唇部はやや外反する。したがって、全体的に不安定に見える。底部は糸切り痕が片寄りの形で残存している。灰白色を呈し、生焼き状態である。

本址は全掘調査が出来た唯一の住居址であったことは前述した通りである。従って、出土遺物の実態が掌握できた。総数で76点出土しており、内訳は土師器、須恵器が全てであり、灰釉陶器の出土は一点もなかった。

遺物の出土状態は四隅の近くは何も出土しなかったが、その他の場所からはまんべんなく出土していた。この実態はカマドを中心としてその近くでの住居址使用の状況が分かるのである。



第10図 第10号住居址出土遺物分布図



第11図 第10号住居址出土遺物実測図 (1 : 2)

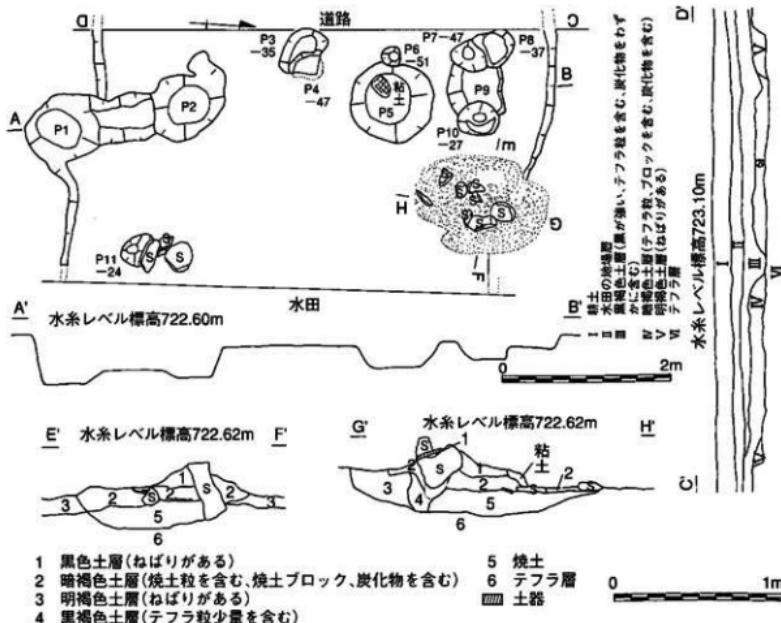
(3) 平安時代の遺構と遺物

第2号住居址（第12図 図版3）

本址は北側で第3号住居址に近接した位置に検出され、表土面より40cm位下った砂を混合したソフトテフラ層面を掘り込んで構築した竪穴住居址である。平面プランはどの隅も検出されなかつたが、時期的にみて、隅丸方形状を呈すると思われる。規模は南北5m×50cm程度、東西は用地外のため発掘調査は不可能であった。

壁高は10cm程度と極めて浅く、外傾気味で、凹凸が多く、軟弱であった。構築当初のそれはもう少し高かったと思われるが、水田造成時に上面は削り取られて、結果的に浅くなつたものと思われる。床面は若干の凹凸を認め、堅い叩き状を呈し、一部分は貼床になつてゐる。柱穴は住居址の全貌が把めず、その総数及び配列状態は不明であるが、現段階で、P2、P9はその大きさからして主柱穴に成り得えようである。カマドの近くのP5内から多量の焼土塊が検出され、存在場所より灰捨場の機能を有しているのであろう。

カマドは北壁中央部付近に構築された石組粘土カマドで、その残存状態は悪く、カマドの骨格に利用した砂礫と粘土が散乱していた。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土し、よつて、本址は平安時代の住居址と想定される。



第12図 第2号住居址実測図（上）・第2号住居址カマド断面図（下）

遺物（第13～14図）

第14図（1）は土器部鉢で、口縁径24.4cmを測るが、胴部、底部は欠損しているので、器高及び底径は測定できない。外面はカキ目痕が継走し、文様効果をあげている。赤褐色を呈し、焼成は良好、少量の長石を含む。

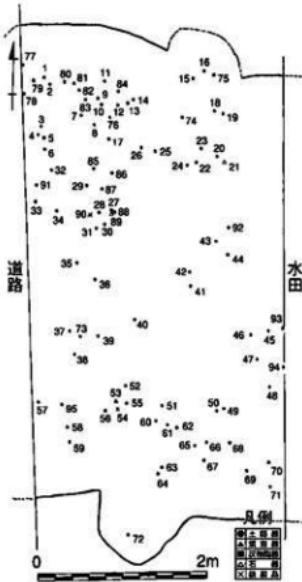
（3）は土器部壺の底部破片である。付高台は外側に張る三日月形を成し、上部の壺部分は欠損している。茶褐色を呈し、焼成は良好、少量の雲母を含む。

（2）、（4）、（5～6）は土器部壺で、いずれも回転糸切底を呈している。（2）は半完型品に対し、（4～6）は完型器である。（2）は図上復元によって測定可能であり、口縁径10.9cm、底径5.9cm、高さ3.2cmを測る。（4）は口縁径10.6cm、底径5.4cm、高さ3.6cmを測る。（5）は口縁径11.4cm、底径5.8cm、高さ3.4cmを測る。（6）は口縁径11.6cm、底径5.2cm、高さ3.2cmを測る。（2、5、6）の体部はハ字状に直線的に開き、口縁部に至って（2、6）はわずかに外反する。（2、6）は茶褐色、（5）は黒褐色を呈し、焼成は良好で、若干の長石粒を含む。（4）は体部が若干内弯気味を呈し、器壁は肥厚気味である。壺としてはやや小型の部類に属し、赤褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含むために内・外面壁全体にわたってピカピカと輝いていた。

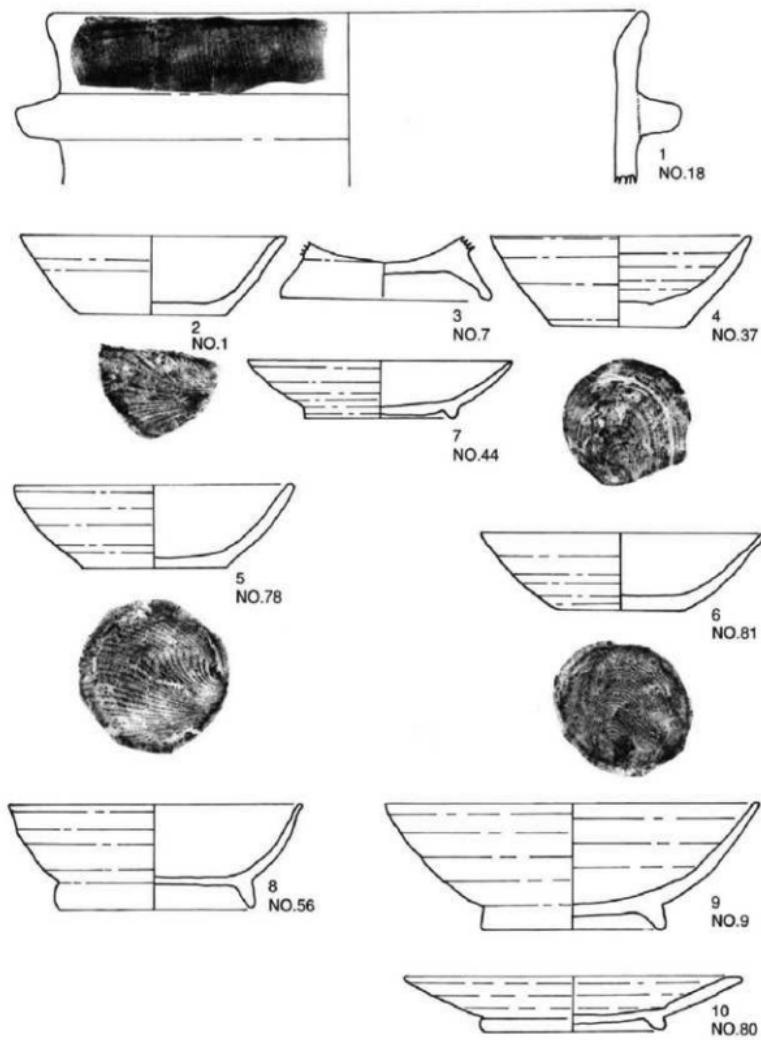
（7）は灰釉陶器皿の口縁部破片であって、図上復元により口縁径10.8cm、底径6.3cm、高さ2.3cmを測る。内面は刷塗りであるが、外面は無釉状態を呈する。

（8）は灰釉陶器碗の口縁部破片であって、図上復元により口縁径11.9cm、底径8.1cm、高さ4.3cmを測る。形態は腰部が張り、口縁に向かって直線状に立ち上がり、口唇近くでわずかに外反する。施釉は刷仕上。底部の付高台は三日月形を成し、ハの字状に開く。（9）は灰釉陶器碗で、ほぼ完型に近い優品である。口縁径15.2cm、底径7.6cm、高さ5.1cmを測る。形態は腰部が張り、口縁に向かって直線状に立ち上がり、全般的にハ字状に開いている。施釉は刷り仕上。底部の付高台は三日月形を成す。

（10）は灰釉陶器段皿の完型品で、口縁径13.8cm、底径7.5cm、高さ2.3cmを測る。内・外面上ともに施釉は刷り仕上で、全面に及んでいる。底部の付高台は三日月形を呈し、頂部は尖り気味で、ハの字状態を成す。



第13図 第2号住居址出土遺物分布図



第14図 第2号住居址出土遺物実測図 (1 : 2)

第3号住居址（第15図 図版4）

本址は現市道の東側、第2号住居址に南側で近接した位置に検出され、表土面より50cm位下った砂混合のソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址で、平面プランは東側が用地外のため調査ができず、その全体は把握できないが、検出された二隅（南西隅、北西隅）から想定して隅丸方形状を呈すると思われる。規模は南北3m・20cm程度、東西は前述した事由によって測定不可能であった。平安時代の住居址としては小さい部類に属すると思われる。

壁高は25~30cm位を測り、壁高としては極、一般的であった。壁面の状態は外傾気味で、凹凸が多く、軟弱状態を呈していた。

床面は大般平坦で、かたい叩き状を呈していたが、ほんの一部分は貼り床状になっていた。

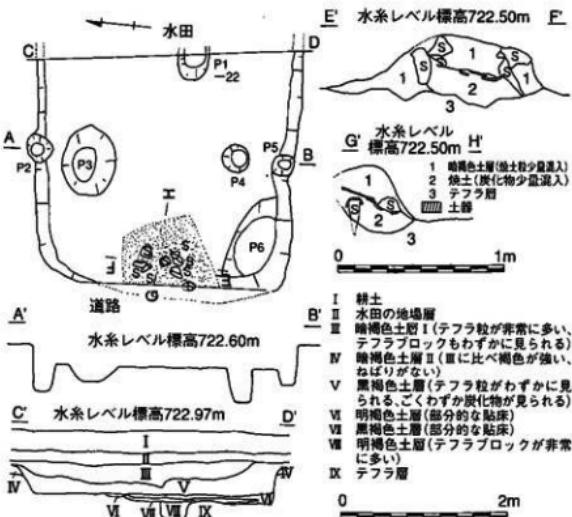
柱穴は本址の全体像が分らないので、本数及び配置状態は不明である。ただ、P3は主柱穴、P2、P5は母屋柱の用途を具備している。

カマドは西壁中央部付近に構築された石組粘土カマドであり、残存状態は不良であったが、両袖石及び粘土の貼り付けは良好であった。

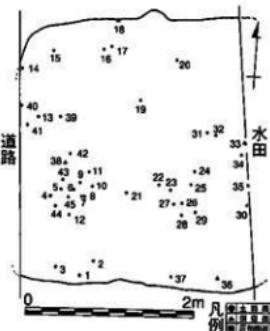
遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が出土し、よって本址は平安時代に位置づけが可能と思われる。

遺物（第16~17図）

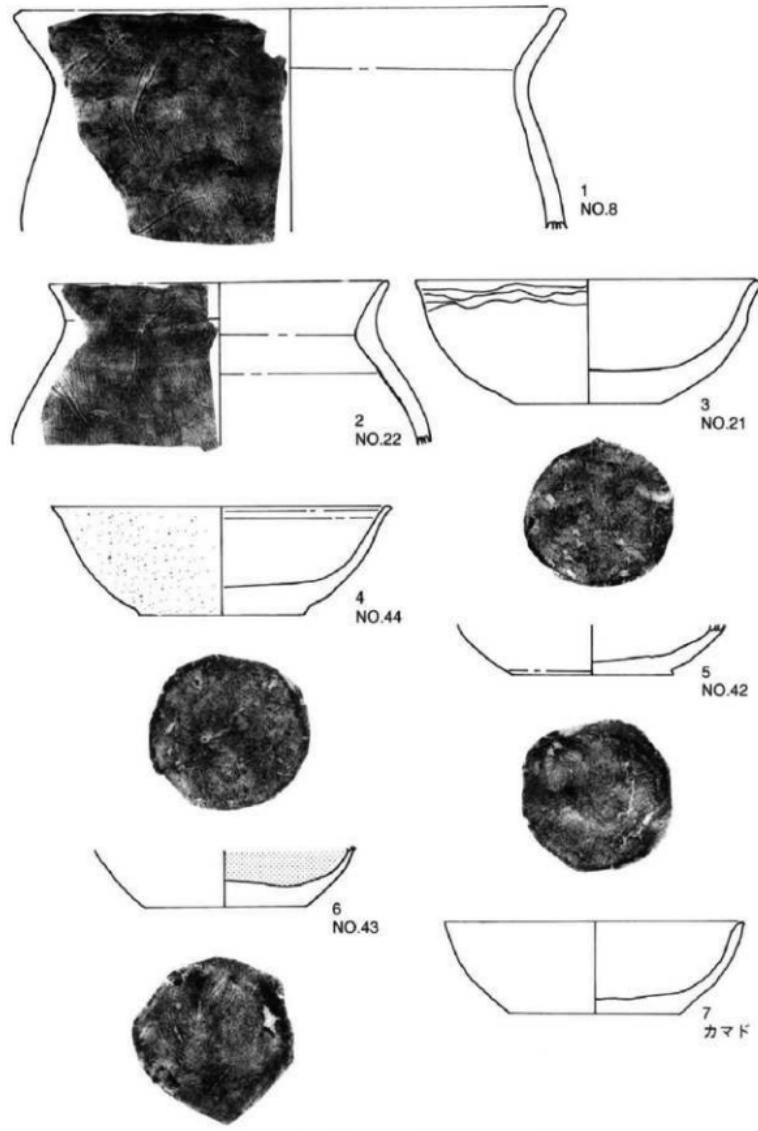
第17図（1~2）は口縁部が大きくくの字に外反し、最大径を胸部に有する土師甕である。二つとも図上復元によって口縁径は分かるが、器高は不明である。（1）は口縁径22.3cm、（2）のそれは13.7cmをそれぞれ測る。ともに外面全体にわたってカキ目文が斜走し、時期的特色をよく描き出している。色調は黒褐色（1）、茶褐色（2）を呈し双方と



第15図 第3号住居址実測図（左）・第3号住居址カマド断面図（右）



第16図 第3号住居址
出土遺物分布図



第17図 第3号住居址出土遺物実測図（1：2）

もに少量の長石を含み、焼成は良好。

(3~7)は土器師壺であるが、器型の違いが見られる。壺の腰部がやや内弯し、口縁部が大きく外反するもの(3~4)、壺の大部がやや内弯し、口縁部がゆるやかに外反するもの(7)、底部だけで器型の変化が分からぬるもの(5~6)と様々であった。(3~4、5~6)は回転糸切り痕を残し、製作工程がよく理解できる。(6)は内黒で黒々と光沢を放っていた。これらの壺は黒茶褐色を呈し、焼成は良好であった。

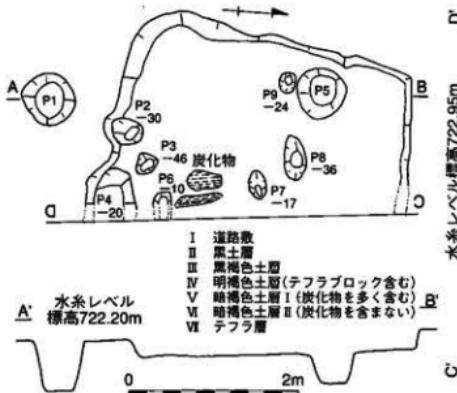
第4号住居址(第18図 図版5)

本址は今回、発掘調査した地区のはば中央部付近に検出され、東側は現舗装道路の為、調査不可能であった。表土面より80cm位下がった砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築され、検出した二隅の状態からみて、隅丸方形形状の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北3m65cm程度、(東西は用地外のため不明)を測る。当然ながら東西の規模は南北のそれとほぼ近似値を示すと思われる。

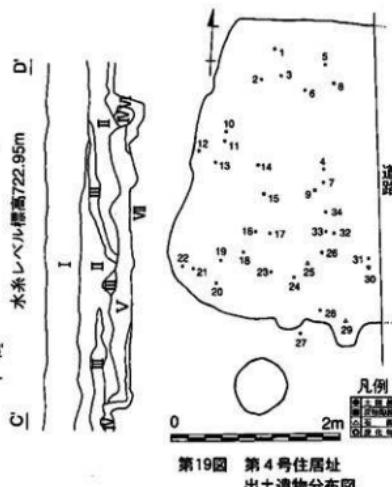
壁高は25~30cm位とやや低めであり、外傾気味を呈し、凹凸が多く、軟弱であった。床面はブロック的に凹凸はあったが、全般的にみて、平坦で、堅い叩きとなっていた。柱穴は住居址の全体像が不明なためにその実態は把握出来なかった。第18図上P1、P5は本住居址とは直接的に関連はなく、その形態、配列状態からみて、何か倉庫の色彩を持つ柱穴列と察せられる。

床面上に火災にあったとみて柱材の炭化物が相当量検出された。P2、P8はその深さから想像して本住居址の主柱穴になり得る条件を持っている。

遺物は土器器、灰釉陶器片が出土しており、よって平安時代の住居址と考えても妥当であろう。



第18図 第4号住居址実測図

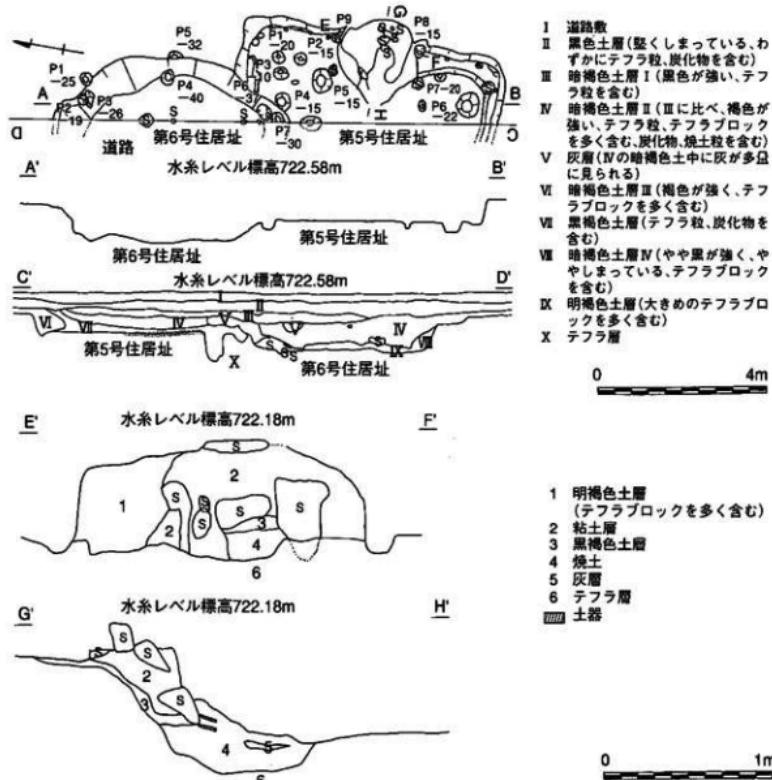


第19図 第4号住居址
出土遺物分布図

第5号住居址（第20図 図版6）

本址は西側で現舗装道路下で発掘調査不可能、北側で第6号住居址に切られた状況下で検出された。表土面から50cm位下った砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで構築され、発見された二隅の状態からみて、隅丸形状の平面プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北6m80cm程度、（東西は先に述べた理由により発掘調査は不可能）を測る。このようしたことからして、東西の規模は南北規模の大きさからして、ある程度の数値は算出可能である。一辺が7mに近い数値を示す平安時代の住居址は大型の部類に属すると思われる。

壁高は50cm内外と、やや高めであり、凹凸が多く、外傾気味を呈していた。床面は部分的に凹凸はあったが、全般的には平坦で、堅い叩き状を呈し、良好であった。柱穴は住居址の全体像が見られないので、本数及び配置状態は不明である。



第20図 第5・6号住居址実測図（上）・第5号住居址カマド断面図（下）



1
NO.76

第22図 第5号住居址出土遺物実測図（1：2）

カマドは東壁の中央部近付に構築された石組粘土カマドであり、保存状態は極めて良好であった。特に焚口及び両袖石付近の粘土の貼り付けは厚く、しっかりしていた。カマドの近くの床面に南北に等間隔で、平たい石が列状に配置されていたが、土台石的用途を有していると思われる。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、よって本址は平安時代に位置づけられよう。

遺物（第21～22図）

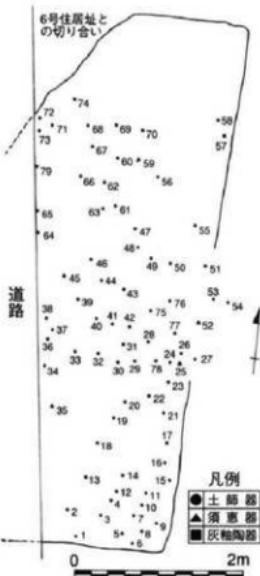
第22図（1）は図上復元によって口縁径18.2cmが測定できた土師器小型壺で、大きく「くの字状」に外反する点と、口唇部が極端に口そぎ状態が主特徴である。外面にカキ目痕が横走。茶褐色を呈し、焼成は良好。

第6号住居址（第20図 図版6）

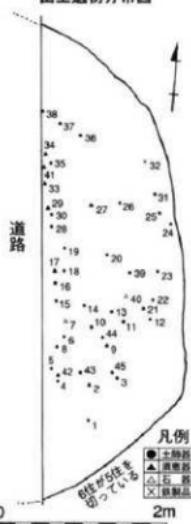
本址は南側で第5号住居址を切った状態で検出されている。したがって前述した第5号住居址よりも新しくなる。よって、本址は平安時代に位置付けが可能となってくる。表土面より50cm位下ったソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址である。規模、壁、床、柱穴、カマドの状態はほんのわずかな発掘面積だけであったので、それらの実態は把握できなかった。

遺物（第23～24図）

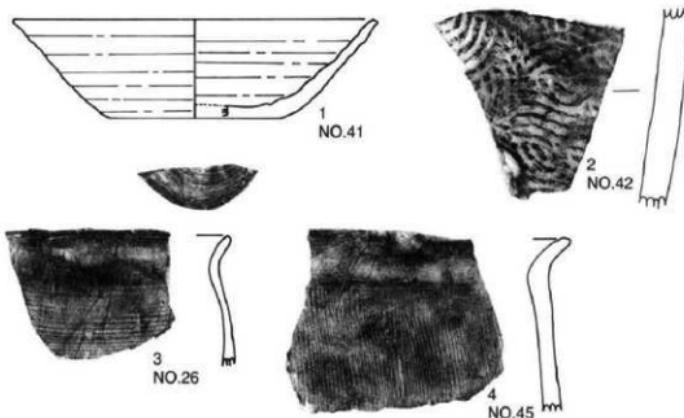
第24図（1）は須恵器壺で、図上復元によって口縁径14.9cm、底径7.1cm、器高4.0cmを測る。腰部はやや張り出し、やや開き気味で口縁部に至り、口唇はわずかに外反する。灰黒色を呈し、焼成は良好。（2）は須恵器の破片で青海波の文様がよく分かる。（3～4）は大きく、くの字状に外反する土師器壺であり、器厚は（3）では4mm、（4）では8mmを測る。外面にカキ目痕が横位状に（3）、縱位状に（4）が無数に走っている。ともに赤茶褐色を呈し、焼成は中位で、少量の長石を含む。



第21図 第5号住居址
出土遺物分布図



第23図 第6号住居址
出土遺物分布図



第24図 第6号住居址出土遺物実測図（1：2）

第7号住居址（第25図 図版5）

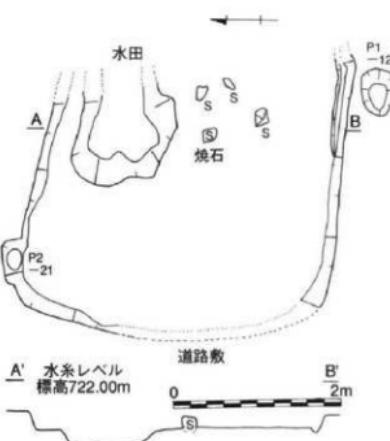
今回、農免道路開通のため、現在、舗装されている市道を有効利用するように設計した。したがって拡幅する部分はほんのわずかであり、その幅は広いところで5m程度しかなかった。本址は、これにまさしくびたりと一致して、東側は用地外のために発掘調査ができなかつた。

さいわいに南北は全面的に発掘でき、その規模は3m60cm程度を測る。東西の規模は類推するに南北の規模と大体同一位と思われる。

壁高は20~30cm位を数え、凹凸があり、軟弱で、外傾気味を呈していた。

床面は若干、凹凸があり、堅いタタキ状態を成していた。柱穴は住居址の全体像が把握できないので、本数、配置状態は不明である。南東の一角に焼石が散乱していたが、おそらくカマドに使用したのではないか。もし、これが本当だとすればカマドは東壁に構築したと考えられる。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器片が出土しており、よって本址は平安時代に位置づけられる。



第25図 第7号住居址実測図

遺物（第26～27図）

第27図（1）は灰釉陶器坏の底部破片であるが、図上復元によって、かろうじて図面作成ができ、底径8.7cmを測る。腰部は若干、外側に張り出し、三日月型の付高台を有している。内・外面とも釉のかかり具合は良好である。灰白色を呈し、焼成は良好。

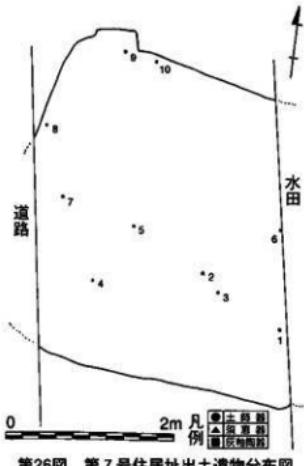
（4）時期不詳の特殊遺構（第28図 図版9）

本特殊遺構は全面的に発掘調査がなされた。表土面より40cm位下がった砂質混合のソフトテフラ層を掘り込んで特殊遺構を構築してある。その規模は南北5m 70cm程度、東西4m 10cm程度をそれぞれ測定できた。

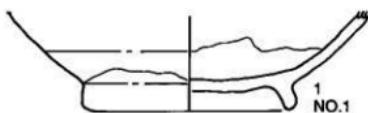
壁高は25～30cm位を有し、外傾気味、軟弱で凹凸は多かった。床面は堅く、凹凸が顕著であった。

遺物は何も出土せず、時期不詳である。

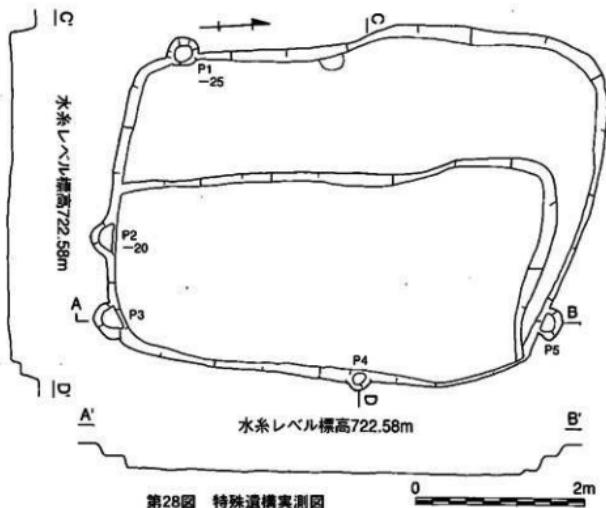
（飯塚政美）



第26図 第7号住居址出土遺物分布図



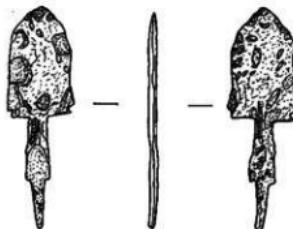
第27図 第7号住居址出土遺物実測図（1：2）



第28図 特殊遺構実測図

(5) その他の遺物

第29図は多量に堆積した川砂の中より出土した平根型鉄鎌の完形品である。全長8.9cm、身の長さ4.5cm、身の最大幅2.7cm、中茎4.5cmを測る。かなり腐蝕は進んでいるが、鉄質が良好とみて、残存状態は良好である。



第29図 鉄鎌実測図 (1:2)

第Ⅲ章 所 見

今回の大原遺跡発掘調査は前述した下手良中原遺跡と同様な事業導入による埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査である。この調査報告書は平成12年度内に発刊する責務があるために、充分なる時間を報告書作成に費やせなかつた。従つて、実測図、図版を主体に、しかも限定された面積の調査であったために、図面自体は不十分な状態で掲載されているが御容赦願いたい。

今回の調査では奈良時代の竪穴住居址1軒、奈良～平安時代の竪穴住居址3軒、平安時代の竪穴住居址6軒、時期不詳の特殊遺構1基であった。これらについて、及びこれらから出土した遺物について極、簡略に述べる。住居址は諸条件によって全貌が把握できたのはわずかに1軒のみであったが、調査された部分より想定するに、10軒とも全て、隅丸方形状を呈すると思われる。カマドの検出されたのは、第1号住居址、第8号住居址、第10号住居址、第2号住居址、第3号住居址、第5号住居址であり、石組粘土カマドで骨格を成していた。

次に遺構に伴う遺物に触れておく。第1号住居址の主な出土遺物は土師器高坏。第10号住居址の主な出土遺物は土師器内黒坏、須恵器坏。第2号住居址の主な出土遺物は土師器鍔釜、土師器坏、土師器付高台坏、灰釉陶器皿、灰釉陶器碗、灰釉陶器段皿。第3号住居址の主な出土遺物は土師器壺、土師器坏。第5号住居址の主な出土遺物は土師器小型壺。第6号住居址の主な出土遺物は須恵器坏、土師器壺。以上の事からして、出土遺物の主流は土師器、須恵器、灰釉陶器（10世紀～11世紀代、折戸53号窯の所産）であり、奈良時代後半から平安時代にかけて、大集落の存在が明確化してきたのである。これはまさしく「下手良中原遺跡」で述べたように、古代の「豆良郷」の存在が浮彫りされてくるのであり、さらにこの郷の存在範囲も掌握されるのである。

（飯塚政美）

図 版



遺跡地を南側より眺む



グリット振り



第1号住居址



第1号住居址カマド



第2号住居址



第2号住居址カマド



第3号住居址



第3号住居址カマド



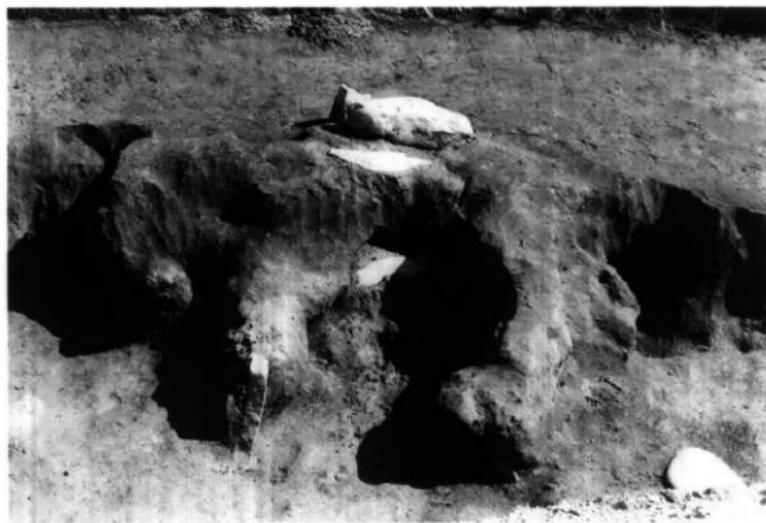
第4号住居址



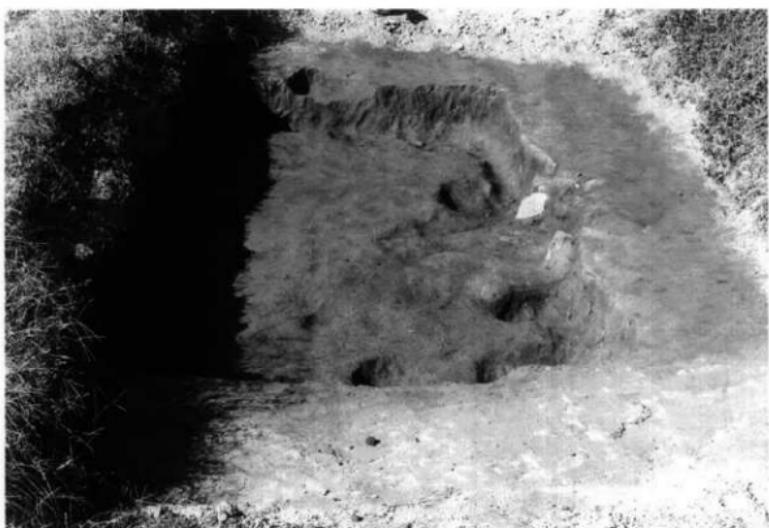
第7号住居址



第5・6号住居址



第5号住居址カマド



第 8 号住居址



第 8 号住居址カマド



第10号住居址



第10号住居址カマド



第 9 号住居址



特殊遺構



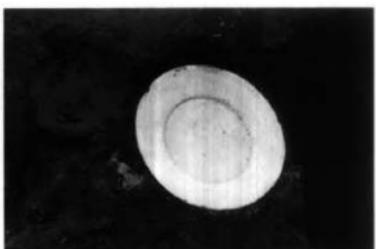
土師器出土狀況（第 2 號住居址）



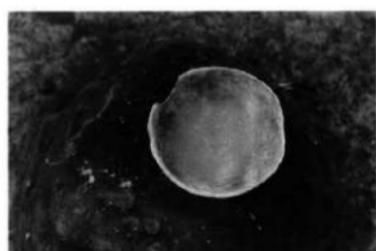
土師器出土狀況（第 2 號住居址）



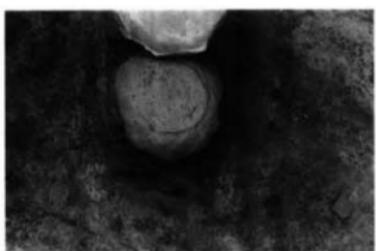
土師器出土狀況（第 2 號住居址）



灰釉陶器出土狀況（第 2 號住居址）



土師器出土狀況（第 3 號住居址）



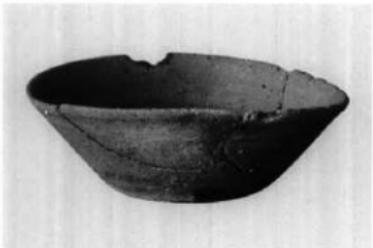
土師器出土狀況（第 3 號住居址）



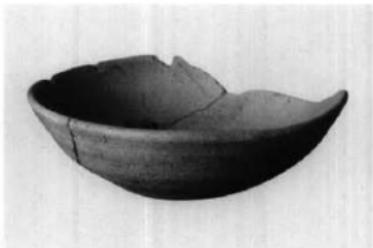
土師器出土狀況（第 10 號住居址）



須惠器出土狀況（第 10 號住居址）



土師器（第2号住居址 NO37）



土師器（第2号住居址 NO78）



土師器（第2号住居址 NO7）



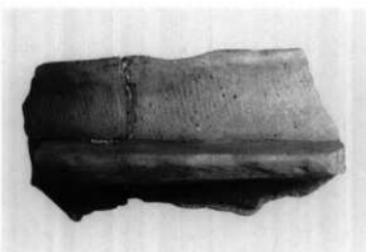
土師器（第2号住居址 NO81）



灰釉陶器（第2号住居址 NO9）



灰釉陶器（第2号住居址 NO80）



土師器鉗釜（第2号住居址 NO18）



土師器（第3号住居址 NO21）



土師器（第3号住居址 NO44）



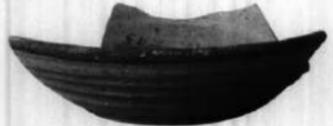
土師器（第3号住居址カマド内）



須恵器（第10号住居址 NO10）



須恵器（第10号住居址 NO76）



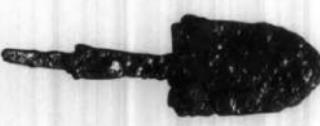
須恵器（第10号住居址 NO73）



土師器（第10号住居址 NO41）



土師器（第10号住居址 NO31）



鐵鎌

報告書抄録

ふりがな	おおはらいせき						
書名	大原遺跡						
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書						
編著者名	友野良一 飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦2001年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
おおはら 大原	ながのけん いなし 長野県伊那市 おあざてら さわおか 大字手良沢岡	伊那市	169		平成12年 9月4日 ～ 平成12年 11月12日	1,300	農林漁業 用揮発油 税財源身 替農道整 備事業 (竜東地 区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大原	集落址	奈良時代 平安時代	堅穴住居址 10軒 特殊遺構 1基	奈良時代土師器 奈良時代須恵器 平安時代土師器 平安時代須恵器 平安時代灰釉陶器 奈良時代鉄鎌 平安時代刀子	道路拡張部分の極めて限定された調査であったにもかかわらず奈良時代堅穴住居址 1軒、奈良～平安時代堅穴住居址 3軒、平安時代堅穴住居址 6軒がそれぞれ検出され、古代「豆良郷」の存在性が強く示唆される。		

松太郎窪遺跡

目 次

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	4
第1節 発掘調査に至るまでの経緯.....	4
第2節 発掘調査の組織.....	4
第3節 発掘調査日誌.....	5
第Ⅱ章 発掘調査.....	5
第1節 調査の概要.....	5
第Ⅲ章 所 見.....	5

挿 図 目 次

第1図 地形及びトレンチ配置図（袋図）

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景及び発掘調査状況

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった松太郎窟遺跡は農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業竜東地区に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成12年7月17日付けで、上伊那地方事務所長小林俊規と伊那市長小坂権男両者間で委託契約書を取り交わす。

平成12年7月18日付けで伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（手良地区）団長友野良一両者間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

平成12年11月7日付けで、松太郎窟遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、松太郎窟遺跡埋蔵物発見届についてを伊那警察署長宛に提出。

平成12年11月7日付けで、松太郎窟遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長　登 内 孝（平成13年1月25日から）

　　小田切 仁（平成13年1月24日まで）

委員長代理 小 坂 栄 一

委 員 小 松 光 男（平成13年1月24日まで）

　　伊 藤 晴 夫（平成13年1月25日から）

　　上 島 武 留

教 育 長 保 科 恭 治

教 育 次 長 唐 沢 勇

事 務 局 酒 井 俊 彦（社会教育課長）

　　伊 藤 初 美（社会教育課長補佐 女性室長）

　　白 鳥 今朝昭（社会教育係長）

　　斎 藤 峰 子（社会教育青少年係長）

　　飯 塚 政 美（社会教育係）

　　牧 田 としみ（　　）

事務局 高松慎一（社会教育係）
発掘調査団
団長 友野良一（日本考古学協会会員）
調査員 飯塚政美（　　タ　　）
タ 本田秀明（長野県考古学会会員）
タ 高松慎一（上伊那郷土研究会会員）
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 向山治男
小田切守正（敬称略順不同）

第3節 発掘調査日誌

平成12年11月1日（水） 事務局職員にて発掘調査を実施する。

平成12年11月2日（木） 昨日と同様に発掘調査を実施するが、遺構・遺物の検出は何もなかった。本日をもって発掘調査終了。

平成12年11月～平成13年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、3月の報告書刊行に努力を払った。

平成13年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

第Ⅱ章 発掘調査

第1節 調査の概要

本遺跡の調査にかかる寸前になって以前に、この周辺は白土採取を実施した地域と知らされた。そこで、部分的に白土採取が実施されなかった先端部付近ヘレンチを三本入れてみると全く、何の遺構・遺物も検出されなかった。

第Ⅲ章 所見

本遺跡地は前述したように、南側は下手良中原遺跡、北側は大原遺跡にはさまれた状態になっており、当然ながら、遺構の存在度は濃厚と想定されたが、広範囲の白土採取のために、遺跡地は大部分破壊されてしまっていた。

（飯塚政美）

図 版



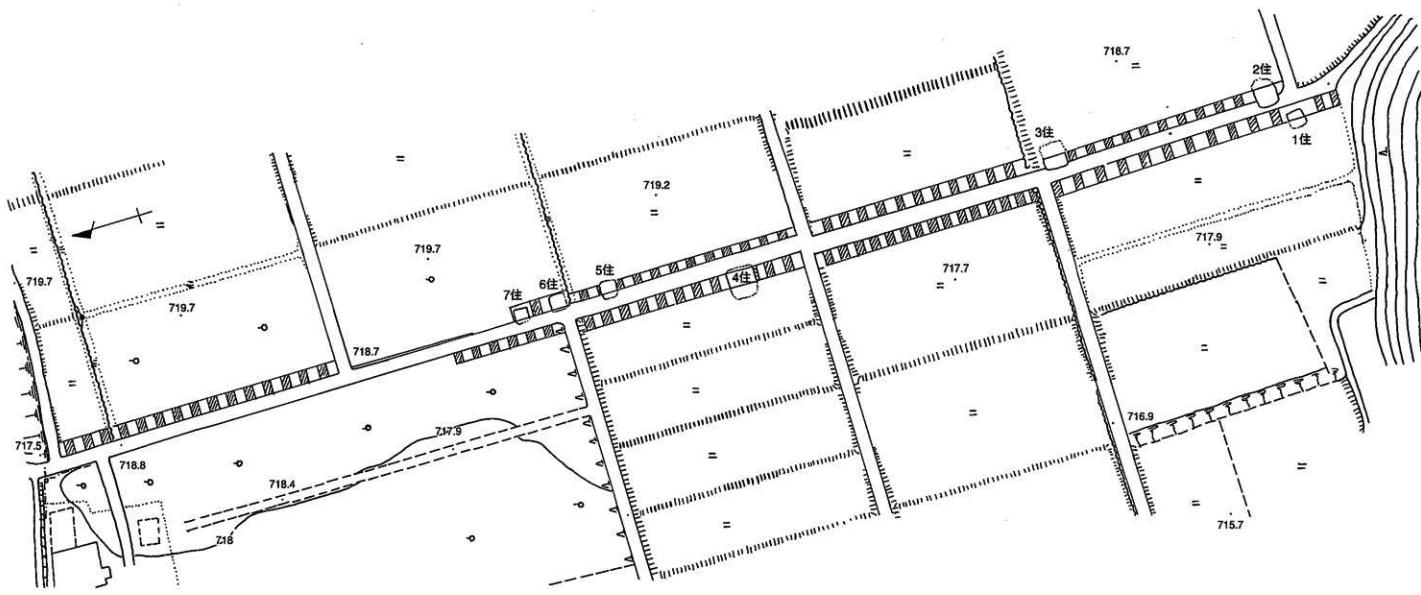
遺跡地を北側より眺む



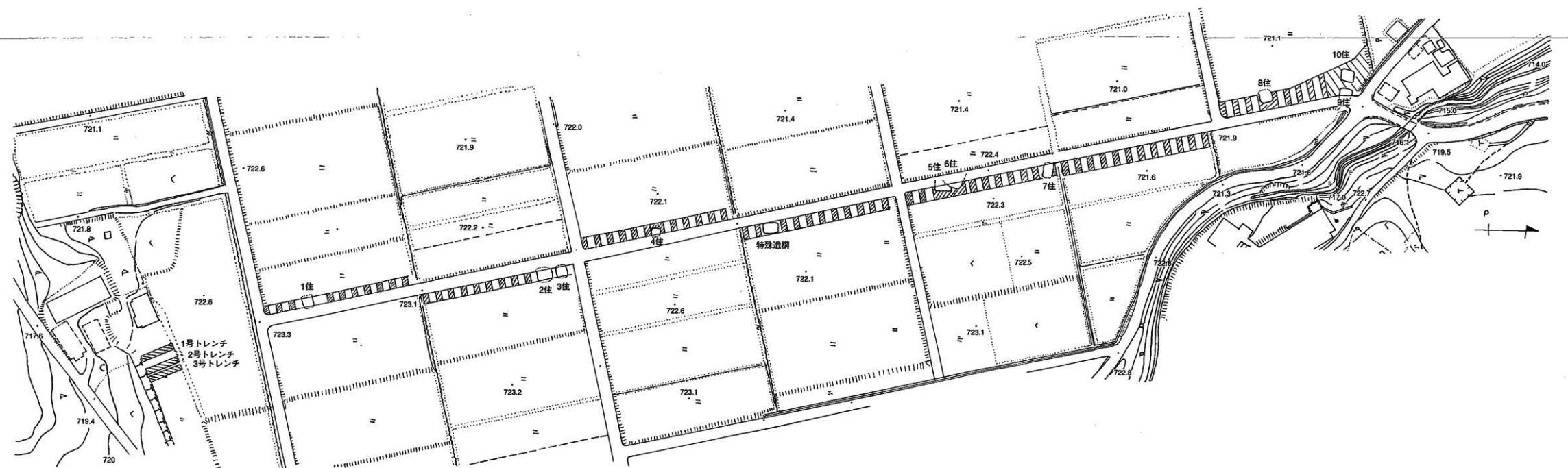
発掘調査されたトレンチ

報告書抄録

ふりがな	まつたろうくぼいせき						
書名	松太郎窪遺跡						
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（竜東地区）						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書						
編著者名	友野良一 飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦2001年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
まつたろうくぼ 松太郎窪	ながのけん いなし 長野県 伊那市 おおあざてら さわおか 大字手良沢岡	伊那市	167		平成12年 11月1日 ～ 平成12年 11月2日	100	農林漁業 用揮発油 税財源身 替農道整 備事業 (竜東地 区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
松太郎窪	集落址	奈良時代 平安時代	なし	なし	本調査地点はかつて白土が採取されており、その時に何もかも破壊されてしまって、今回の調査では遺構及び遺物は何も検出されなかった。		



第1図 地形及び遺構配置図 (1 : 1,000) (下手良中原遺跡)



第1図 地形及びトレンチ配置図 (1 : 1,000) (松太郎窪遺跡)

第1図 地形及び遺構配置図 (1 : 1,000) (大原遺跡)

下手良中原・大原・松太郎窪遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業
(竜東地区)

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

平成13年3月7日 印刷

平成13年3月8日 発行

発行所 上伊那地方事務所
長野県伊那市教育委員会

印刷所 伊那市 (株)小松総合印刷

